

# 明日に生きる

— 作文コンクール入選作品集 —

第30号



令和元年度

東京都産業教育振興会

## 表紙デザイン

このイラストは、若者の想像力の豊かさをイメージしました。また、鳩と未来都市という組み合わせで、未来を見据えながらも過去も忘れないということを表現しました。

東京都立農産高等学校  
1年 磯尾 梨乃

# 明日に生きる

第三十号

— 作文コンクール入選作品集 —

明日に生きる 第三十号 作文コンクール入選作品集 目次

講評

作文選考を通じて	中学校の部	選考委員長（稲城市立稲城第一中学校長）	跡邊 昭枝	1
作文選考を通して	高等学校・専修学校の部	選考委員長（東京都立青梅総合高等学校長）	鈴木 信也	2
表彰式の記念写真				

中学校の部

最優秀賞	「働く」とは何か	東京都立桜修館中等教育学校	三年	清水 結子	5
優秀賞	両方取れば良いんじゃない？	大田区立大森第一中学校	二年	東海林 千仁	6
優秀賞	人生の大先輩	東京都立大泉高等学校附属中学校	二年	横山 千琴	8
佳作	やすりがけ	新宿区西早稲田中学校	三年	鈴木 円花	10
佳作	木馬と父	新宿区西早稲田中学校	三年	テッリンスイウ	12
佳作	調理実習で学んだこと	新宿区西早稲田中学校	三年	平泉 輝将	13
佳作	ボランティアから生まれる感情	墨田区立文花中学校	三年	石島 咲良	15
佳作	私の夢	墨田区立吾嬬立花中学校	三年	山下 夢翔	16
佳作	責任と喜び	江東区立大島中学校	三年	古川 智加	17
佳作	ボランティアを通じて	江東区立深川第七中学校	三年	沼田 陽菜	19
佳作	情報技術と地球環境	北区立赤羽岩淵中学校	三年	進藤 千歳	20
佳作	挑戦から始まる世界	北区立稲付中学校	三年	伊藤 沙保	21
佳作	新しい社会とスマート農業	北区立稲付中学校	三年	福島 有紀	23
佳作	受験生の決意	北区立稲付中学校	三年	森 美郷	24

高等学校の部

佳	作	勤労留学から学んだこと	荒川区立第七中学校	二年	川村真歩	26
佳	作	縁の下の力持ちになるために	江戸川区立松江第五中学校	三年	村山想	27
佳	作	職場体験やボランティア体験で得ること	調布市立第八中学校	一年	山口朋佳	29
佳	作	つくることの喜び	町田市立真光寺中学校	三年	福島史弥	30
佳	作	人とつながる仕事	東京都立桜修館中等教育学校	三年	神崎朱由	32
最優秀賞		ホスピタリティ	岩倉高等学校	三年	長廣悠真	34
優秀賞		人に夢を与える	東京都立瑞穂農芸高等学校	二年	瀧瀬妃菜	36
佳	作	スマートアイランドプロジェクト	東京都立大島高等学校	三年	梅田桃馬	38
佳	作	島の産業と生態系を守るために	東京都立大島高等学校	三年	川崎大洋	40
佳	作	ジャポネイラレモンプロジェクト	東京都立大島高等学校	三年	杉山柊斗	42
佳	作	これからの農業支援	東京都立農芸高等学校	二年	大川博子	44
佳	作	漬物の魅力と消費量の拡大について	東京都立農産高等学校	二年	但田愛菜	45
佳	作	生命から学んだこと	東京都立瑞穂農芸高等学校	二年	清水杏樹	47
佳	作	学校の先生	東京都立大島海洋国際高等学校	三年	松川まりも	49
佳	作	食品ロスについて	東京都立忍岡高等学校	三年	齋藤麗菜	50
佳	作	はたらく意味	岩倉高等学校	三年	高橋李央	52
佳	作	我が双肩に担う	岩倉高等学校	三年	千葉聖仁	54
佳	作	将来の夢	岩倉高等学校	三年	福田優也	56
佳	作	想いを形に	日本工業大学附属高等学校	二年	小田翔大	57
佳	作	偏見を無くして見えてきた将来	日本工業大学附属高等学校	二年	滝澤壮太	59

最優秀賞	変化と不変社会での経験が今に活きる	青山製図専門学校	一年	中村直也	60
優秀賞	旅の途中	青山製図専門学校	一年	渡邊あゆみ	62
優秀賞	自分と相手の個性	国際理容美容専門学校	一年	羽田愛華	64
応募校等一覧表					67
応募数の推移					68
テーマ別応募数					70
作文選考委員名簿					71
後援	あとがき				72

## 作文選考を通して

中学校の部 選考委員長

## 跡邊 昭枝



今年度は、二十九校の百八十三編の応募がありました。ただ、一つの学校からの事務局への応募することのできる数は、十編までとなっています。そのため、百八十三編の応募数を超える応募があり、各学校の内部選考で十編に絞られた学校の内部選考を経て十九編が入選し、最優秀賞一編、優秀賞二編、佳作十六編を選考いたしました。今年度の作文の内容では、昨年度に引き続き職場体験学習から、働くことの大切さや喜び、大変さを体験した事で、将来の目標や夢に向かって、今取り組むべき事が分かったなどの作文の応募が多数ありました。体験に基づいて、生徒達が、これからのようにしていったら良いのか、自分と向き合う時間を得た事が、それぞれの作文から読み取ることができました。今回、最優秀賞を受賞した清水結子さんの「働く」とは何か」では、職場体験を通して職業に対する考えの変化が述べられています。事前学習で「働くとは何か」を考えたときは、「社会に貢献し、その分の報酬をもらうこと」と考え

ていました。その後、実際の職場体験中には「どの仕事でも人と人との信頼関係が重要である」と気付き、体験後には、「働くことはお金以上に大切なものが得られる」と表現しており、これからの進路選択にとっても重要なことを学ばれたと感じます。優秀賞の東海林千仁さんの「両方取れば良いんじゃない」では、技術の授業は「ドキドキが止まらない」と表現し、ものづくりへの情熱が伝わります。また木工競技会出場の時、「木材と格闘している姿を家族が応援してくれたことが一番うれしかった」と述べています。「家族のために、夢を追い続ける」との決意で作文を終えている。優秀賞の横山千琴さんの「人生の大先輩」では職場体験で「敬語を使う本当の意味」や、大先輩からの「若いうちはたくさん勉強してやりたいことをやりなさい」とのアドバイスをいただき、気づいたことや、未来の自分を考える貴重な体験となったことが述べられています。

今年度の応募作品は、職場体験、授業、ボランティア活動等の体験を通して、働く事、学ぶ事、人の助けになる事の喜びが感じられる作文でした。また、家族で将来の夢について一緒に考え、家族が関わってくれていることを述べた作品が多いことが印象的でした。家族の暖かい応援の中進むべき道を前向きに考える姿を伺うことができました。最後に今回の「作文コンクール」に応募していただいた生徒の皆さん、ありがとうございました。また、ご指導いただいた先生方、貴重な体験をさせていただいた地域・事業所の皆様、そして保護者の皆様に感謝申し上げます。

## 作文選考を通して

高等学校・専修学校の部 選考委員長

鈴木 信也



今年度は、高等学校の部に九十五作品、専修学校の部には二十作品の応募がありました。一次審査、二次審査を経て、高等学校の部では最優秀賞一作品、優秀賞一作品、佳作十三作品、専修学校の部では最優秀賞一作品、優秀賞一作品、佳作十三作品と決定させていただきました。

高等学校の部の最優秀賞は、岩倉高校長廣悠真さんの作品で、題名は「ホスピタリティ」です。この作品は、自分自身の身近な経験を通して、何気なく受けていた授業の大切さを実感するとともに、「ヒト」から「モノ」へ役目に変化する世の中（本文引用）で、人の普遍的な在り方を実感し、その上で今後の決意を力強く表現した期待の持てる作品でした。優秀賞の瑞穂農芸高校滝瀬妃菜さんの「人に夢を与える」は、過去・現在・未来へと変化していった自分の農業に対する思いを、具体的な表現で綴り、その意気込みが豊かに伝わる作品でした。

専修学校の部の最優秀賞は、青山製図専門学校中村直也さんの作品で、題名は「変化と不変 社会での経験が今に活きる」

です。この作品は、社会人経験を経て、自分の夢を追うためにこの専門学校に入学した作者が、働くことの尊さを実感しそれを伝えていきたいという思いを、グローバルな視点を取り入れての具体的な構成で表現し、意欲に満ちた素晴らしいものでした。優秀賞の国際理容美容専門学校羽田愛華さんの「自分と相手の個性」は、自分の職業観を前面に出し、夢を叶えるためのスタートラインに立つ自分を等身大に見つめている説得力のある作品でした。青山製図専門学校渡邊あゆみさんの「旅の途中」は、自分の人生の現在地を探りながら、長い人生を旅と捉えて一步一步前進していきたいという決意に共感できる作品でした。

選考にあたってはどの作品も力作であり、選考委員を大変悩ませるものでした。ですから優秀作品を選定するという作業は多くの時間を費やしました。その中で、独自性や一貫性があり、将来の職業人として大いに期待できる魅力ある内容である等から審査をいたしました。また、専門学習やその体験等を通して、人間としての在り方生き方について自覚を深め、自己の進路実現に向けてさらに具体的な目標を掲げ、行動しようとする姿が自分自身の言葉で表現されている作品や、自己肯定感や自己有用感が醸成されていく過程に触れることができる作品は高い評価を受けました。

最後になりましたが、今回の作文コンクールに応募やご指導をいただいた各校の先生方に感謝申し上げますとともに、次年度も各校種・各学科から幅広い作品の応募を頂きますようお願い申し上げます。



【中学校の部】 受賞者・選考委員・当会役員



【高等学校・専修学校の部、イラストの部】 受賞者・選考委員・当会役員

## 表彰式当日の役員等出席者 2019.12.20

1	会長	ForeVision(株)取締役・元(株)東京都民銀行頭取	西澤 宏繁	表彰状授与・ご祝辞
2	副会長	東京商工会議所 理事・事務局長	小林 治彦	
3	理事	東京都墨田区教育委員会・教育長	加藤 裕之	
4	理事	東京都墨田区教育委員会事務局 学務課長	西村 克己	
5	理事	岩倉高等学校・校長	浅井 千英	
6	理事	東京都立第四商業高等学校・校長	高石 公一	
7	理事	東京都立忍岡高等学校・校長	岡島 まどか	
8	常任	教育庁都立学校教育部・部長	江藤 巧	ご祝辞
9	常任	教育庁都立学校教育部高等学校教育課・課長	落合 真人	
10	理事	教育庁都立学校教育部ものづくり教育推進担当課長	小川 謙二	
11	理事	教育庁都立学校教育部高等学校教育課主任指導主事	井上 隆	
12	理事	教育庁都立学校教育部高等学校教育課・課長代理	多田 緑	司会(当会事務局長)

## 表彰式会場のスナップ写真



表彰式会場（二重橋前）からの外景



西澤会長から受賞される様子

## 最優秀賞を受賞した皆さん



【中学校】清水結子さん

【高等学校】長廣悠真さん

【専修学校】中村直也さん

中学校の部 最優秀賞

「働く」とは何か

東京都立桜修館中等教育学校 三年

清水 結子

私は、中学二年生の十月に、保育園へ職場体験に行った。職場体験を行った上で、私は事前学習、本番、事後学習の、三つの観点で学んだことがあった。

最初は、「働くとは何か」という授業があった。その論題についてグループになって話し合った。そして、私のグループは、「社会に貢献し、その分の報酬をもらうこと。」という内容にまとまった。しかしこれは、答えが決められたものではなく、人によって違うものであると考えた。また、職業選択する際に考えるべきことも学んだ。生活できる収入であるか、失業することはないかという「経済的側面」、世の中で求められている技術や能力なのか、という「社会的側面」、自分のやってみたいことなのか、という「個人的側面」だ。以上の三つを考える必要があるのだと思った。

また、職業をタイプ別に分けるときに、人を教える職業、物を作る職業など、全部で八種類ものタイプがあり、驚いた。そして、職業によっては、資格や免許が必要なものもあった。事前学習をすることによって、働く意義や職業の種類など、多くのことを学ぶことができたため、今後の人生に生かして

いきたいと思った。

そして、本番の日になった。

最初に行ったのは、子供たちが来る前に、掃除することだ。私は、保育園内だけを掃除するのだと思っていたが、園の外の道路や公園などもきれいにした。正直最初は、わざわざ外まで掃除する必要はないのでは、と思っていた。しかし、掃除をしていると、道行く人々に「おはよう」や「ありがとう」など、たくさんのお言葉をかけられ、三日目には楽しみにもなった。このことから、仕事というのは決してお金もうけのためだけになく、自分に達成感を与えてくれたり、人とのつながりを深めてくれるものであると学んだ。

また、園児との交流では、自分にとっでは危険ではないものも、園児にとって危険になってしまいうこともあるのだと感じた。何事も、子供の目線になって考えることが大切なのだと思った。そして、普段自分が当たり前だと思っていたことも、園児に「なぜ」と聞かれることが多



中学校の部 最優秀賞 清水 結子さん

くあった。そのときに、人に物を説明する大変さを学んだ。  
また、園児と遊んでいる際に、転んでしまった子がいた。私はそれを見て、すぐにおきあがらせようとした。しかし、職場の方に、「できるだけ自分でやらせてあげて」と言われた。私はそれを聞いて、子供の成長のためには、時には自分でやらせてあげることが大切なのだと思う。

私が三日間の中で一番大変だったのは、園児が帰った後の仕事である。少しの異物、ごみでも園児にとっては危険なため、朝以上に念入りに掃除をした。また、窓に貼る装飾を丁寧に作った。園児たちが帰った後も仕事がたくさんあるのだと感じた。

また、私は、先生方の園児たちへの愛情を感じた。「○○くんが最近一人でトイレへ行けるようになったよ。」「○○くんが○○くんが転んでいたのを助けていたよ。」「○○くんが恥ずかしがらずに踊れるようになったよ。」など、三日間一人一人の成長したところを話し合っていた。この会話から、先生方は本当に園児を大切に思っているのだと思った。

職場体験の最後に、園長先生にインタビューをした。「この仕事のやりがいは何か」と質問すると、「一番は子供の成長が見られること。昨年できなかったことができるようになっていると、とても嬉しくなる。」と答えてくださった。私もそれはとても大切なことだと思い、何より、それがこの仕事の一番の意義ではないかと考えた。この他にもいくつか質問をし、どれも心に残る答えをしてくださった。

職場体験で最も印象に残ったのが、笑顔である。保護者の方、先生方、園児の笑顔があふれていた。全ての人が互いに

信頼し合っているように感じ、保育園に限らず、どの仕事でも人と人との信頼関係は重要だと思った。

事後学習では、お礼状を書き、体験内容をレポートや新聞にまとめた。また、職場の方が撮ってくださった写真を見て、自分の成長を感じることができた。

今回の体験を通して、働くとは何か、考えることができた。お金以上に大切なものが得られる、というのはすばらしいことだと思った。これから先、進路を決める上で、職業を選択する時がくると思う。その時は、不安にならずに、今回体験したことを思いだしたい。そして、自分が納得できることを全力で行いたい。

### 中学校の部 優秀賞

## 両方取れば、良いんじゃない？

大田区立大森第一中学校 二年

東海林 千 仁

僕は、ずっと、“大工さん”になりたかった。ものづくりが好きだった僕が、小さいころから描いていた理想の姿は、自分の家を建てている僕だった。それ以外の将来像など、まったく考えていなかった。正確に言えば、職業について知らなかっただけかもしれない。

中学生になって、技術の授業が加わった。ものづくりが好きだった僕は、ドキドキが止まらなかつた。そんなある日、先生に「東海林くんは数学が得意だから、一級建築士を目指すとこの道もあるんじゃないかな？」と言われた。そんなことなど考えていなかった僕は、三十歳の僕が一級建築士として働く姿を想像してみた。うん、悪くないかも。その日から、僕の夢は変わった。小さいころからずっと憧れていた職業が、一瞬にして変わったのだ。

将来の夢も定まり、本格的に数学の勉強に力を入れ始めた二年生のある日、今度は技術科の先生から声を掛けられた。「ものづくり教育学習フォーラムの木工競技会に出場してみない?」

僕は、バドミントン部に所属していたのだが、活動のない日にバドミントン部の仲間五人で“チームものづくりフォーラム”として活動する日々が始まったのだ。この競技会は、大田区で毎年開催されているもので、四時間以内一枚板の材料から一つの製品を完成させるという競技会である。活動初日は、先生がかいた設計図にもとづき、ティッシュケースを作った。ここで初めて、かんなどいうものを使った。上手く削れず、悪戦苦闘したが、完



成したときは嬉しかった。二回目の活動は、実際につくる製品の構想を練った。なかなかアイディアが浮かばず、活動に身が入らない僕たちを見て困った先生は休憩も兼ねて、校庭でサッカーしてきてもいいよと提案してきた。もともと仲の良かった僕たち五人にとって、そういう時間自体も楽しかった。こういう仲間を大切にしたいなあとふと思った。試行錯誤の上、テーマが決まった。“五人で一つの製品”、一人ひとりの製品としても使用できるが、五つの製品を組み合わせたときに、大きめの収納棚になるように、大きさを緻密に計算した。ここで、僕の得意な数学が活かされた。

「全体の幅を四五〇mmにするには、作品Aと作品Bをそれぞれどれくらいにする?」

切りしろも考え、計算した結果を伝え、みんなの役に立つことができた。練習の中で、同じ製品を三回つくることになった。一回目は、八時間以上かかった上に、がたつきが激しく、組み合わせでも一つにならなかった。それでも、もうやりたくないとは思わなかった。苦手だったかんながけも、上達し、先生には「お店で売っているくらいきれいに仕上がったね。」と褒められて嬉しかったし、学校の廊下に飾られた製品を見た友人たちが「すごいね。」と言ってくれたときは、最高の気分だった。

競技会当日、なんとか時間内に完成しそうというタイミングで、くぎ穴の位置を間違っしてしまい、つまようじで補修することになった。それでも修正も含め、いいものに仕上がったと思った。そして、なんと自分の努力が認められ、技能賞という賞をいただくことができた。“五人で一つの製品”と

いうアイデアが認められたのだ。僕は、正直信じられなかった。こんな大きな舞台で表彰されたのは初めてで、すごく嬉しかったし、緊張した。五人で協力して頑張ってきたし、喜びも五倍だった。そして、何よりも嬉しかったのは、僕が四時間もの間、木材と格闘している姿を、父と母はずっと応援してしてくれたのだ。中学生になってから、こんなに長い時間、応援し続けてくれたのは初めてかもしれない。

この経験は「作りたいものを考えるのも楽しいけど、作るのも楽しい。どっちがいいか迷っているくらいなら、両方取れば良いじゃないか！」と気付かせてくれたのだ。この日から僕の夢が、“一級建築士の資格を持っている大工さん”に変わった。

夢が決まってから僕が始めたことは「どうするとされるか」を調べるとのことだ。すると、国家資格が必要ことがわかった。合格率も低く、落ち込まなかったと言えどウソになるが、「よし、取得してやろうじゃないか！」と、いつもとは違うやる気が湧いてくるのがわかった。今までの僕は、難しい問題に直面するとあきらめてしまうことが多くあった。しかし、この夢だけはあきらめなくなかった。小さいころから、ずっといだけ続けてきた夢だから。

数学が得意だと冒頭で言ったが、実際は計算が得意なだけで、文章題などは苦手な単元も多い。国家資格をとる前に、高校に入学しなければならぬ。そのためには、もっともつと勉強しなければならぬ。口で言うのは簡単で、どうしても面倒なことを後回しにしてきた僕は、夏休みの宿題なんて、慌てて最終日に帳尻を合わせる始末だった。でも、未提出に

だけはしなかった。そんなことは当たり前のことかもしれないが、よく言えば、“あきらめが悪い”のが僕の長所だからだ。また、僕の夢を応援してくれている父や母は、勉強を教えてくれたり、僕がやる気になる言葉をいつも掛けてくれる。そんな家族のためにも、あきらめず夢を追い駆け続けたいと思っている。

僕の夢は“一級建築士の資格を持っている大工”と言ったが、本当はちょっと違う。『自分の家だけではなく、友だちや家族、つまり僕にとって大切な人たちの家をつくること』これが本当の夢だ。これまで大切な人たちにたくさん迷惑をかけてきた僕だが、この夢を叶えることで恩返しができるばと思っている。最後に、僕が、みんなにどうしても伝えたいことは、やりたいことがあったら、“両方取れば、良いんです!”

## 人生の大先輩

東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

横山千琴

私は七月の初め職場体験で三日間デイサービスセンターを訪れた。事前訪問で一度デイサービスセンターに伺って、所長さんのお話を聞いた時、いくつかの注意事項を言われた。

「目線を合わせること」「敬語を使うこと」

正直、とても簡単なことだと思った。敬語は普段だって使え

ているし、目線を合わせるなんて、しゃがんで話せば良い、そのくらいだったら、私にだって簡単にできるんじゃないか、とその時は思っていた。

実際に職場体験が始まって初日の一番最初の仕事はお出迎えだった。その日一日相手をさせてもらう方だから、と思い、元気にあいさつをして、「これから三日間、職場体験でお世話になります。」とあいさつをした。そのときはどの方も挨拶を返してくださったり、こちらこそよろしくお願ひします、と笑顔で言ってくれたりしてとてもうれしかった。しかし、問題はその後におこった。職員さんたちが、健康観察をしている間、私たち中学生は健康観察を待っているお年寄りの方とお話しする時間があった。色々な方と話したのだが、あまり人と話すのが好きではないような方もいれば、とても気さくにたくさんのお話を質問して下さる方もいた。その中で、戦時中のことを話してくれた方がいた。もちろん戦争の頃の勉強は、小学校の頃からしていたし、本だっただけでたくさん読んだことがある。でも、実際に体験した話を詳しく聞くのは初めてだった。すごく衝撃だった。毎日のように空襲があったなんて本当に想像がつかない。私と同じくらいの年齢の時に、「国のため」に学校へ行かず働いたり、私も小さい子が、親元をはなれて自分の命を守るために疎開したり。そのような事実があったことは知っていたが実際に体験して、さらにそんな状況を



生き抜いてきた人生の大先輩が目の前でその時のことを話すと戦争のつらさが本当に伝わってきて、何も言えなくなってしまう。「だから若いうちはたくさん勉強してやりたいこともやるんだよ。」と、若いときに勉強があまりできずやりたいことをできなかった時代を生き抜いて今ここにいる人生の大先輩からの心に刺さるアドバイスをいただいた。今までの私は、「テストがめんどうくさい」や「勉強したくない」とつい、言ってしまうていたが、その時代の人にとったら、ひどく贅沢だと思う。だから、今勉強できるといふのはとても幸せなことだと思えたと同時に、最初に所長さんが敬語を使いなさい、とおっしゃっていた本当の意味が分かった。年上だから敬語を使う、という表面的な意味だけでなく、そういう厳しい時代を生き抜いてきて、今の日本をつくったといっても過言ではない人たちに心の底からの敬意をはらう意味でお年寄りの方には敬語を使うのだと思った。

その後、お年寄りの方と一緒にトレーニングなどをした。その間に、トイレに行きたくなつた方などがいて、中学生は立ち上がる際に手を貸すお手伝いは危険なので禁止されたため、職員の方を呼んだが、職員の方がお年寄りの方の手をとって立ち上がるお手伝いをしている様子を見ると、職員の方がしている行動一つ一つが本当に丁寧だった。立ち上がってからトイレへ歩いていくのを支えていた時も、お年寄りの歩くスピードに合わせていて職員の方は本当にお年寄りの方のことを考えているのだなと思った。その時、私は所長さんがおっしゃっていたことを思い出した。「目線を合わせる」こと「ただしゃがんで目線を合わせるだけじゃないんだ、

と思った。お年寄りの方の目線になって、どうしたら一番お年寄りの方が楽かを考える、という意味の「目線を合わせること」だったんだ、と初めて私は気づいた。

所長さんが最初に言っていた二つの注意事項。初めはそんなの簡単だと思っていたが、もっともって深い意味があることに気付いた。これらの行動は簡単、難しいで判断されるものではなく、お年寄りの方を敬い、想う気持ちからくるものだという事も分かった。また、最終日に、所長さんはこんな話もしてくれた。「この建物には、デイサービスセンター以外に、体が不自由で一人では生活することがむずかしい方が住みこみで介護を受けている、いわゆる老人ホームというところがあって、体に穴を開けて、栄養をとっている方もいる。中学生には少し厳しいかもしれないが、このような現実があるということ覚えておいてほしい。」

私はこの話を聞いたとき、このような現実がある中で中学生にできることは何があるかを考えた。三日間デイサービスセンターにいて、お年寄りの方とお話しをして笑顔にすることができた、それこそが今の私たちにできる「介護」なのではないかと思った。専門的なことはできなくても人を笑顔にすることができて嬉しかった。だからこれからも、中学生ができる最大限の行動をとってお年寄りの方を笑顔にすることを、続けていきたいと思った。また、直接でなくても介護の勉強をすることも介護につながると思うため、少しずつ私にできることを増やしていきたい。

## 中学校の部 佳作

### やすりがけ

新宿区西早稲田中学校 三年

鈴木 円花

「ひさしぶりだな、この感じ」紙やすりで木材を磨いているとき、ふと思った。一年生の頃、技術の時間で木製のコーナーラックを作っていたときのことである。「ものづくりって、やっぱり楽しいな」私が改めてそう思った瞬間だった。

私は小学生低学年の頃、友達とよく家の近くの児童館にある木工室に通っていた。作りたいものの設計図を考え、のこぎりで切り、釘を打ち、木製の貯金箱や迷路など、様々なものを作った。完成品は少々不格好でも、頑張って作ったものには自然と愛情が湧き、自分の机の上にも飾っていた。そんなものづくりの中で、私が一番印象に残っているものは、やすりがけだ。

ざらざらとした木材を紙やすりで削るのは気が遠くなる作業だ。手は疲れるし、時間はかかるし、製作の作業の中で一番大変だった時には、一日中やすりがけをしている日だってあった。しかし、どんなに時間がかかっても、木材は必ず滑らかになる。そのため、大変ながらも結果が見えるやすりがけという作業が私は大好きであった。

しかし、転校を機に私はものづくりの世界から離れてしまう。あんなに大事に飾っていた作品も、引っ越しと同時にど

こかへ行ってしまった。そして、楽しくて大好きだったものづくりの記憶は次第に薄れていった。

中学生となったある日、技術の時間に木製の作品を作ると先生から言われた。「そういえば、昔よく作っていたな」と思いながら、作品のサンプルが載っている冊子をパラパラとめくる。しかし、この時の私は昔の私とは違っていた。「面倒くさいな、できるだけ簡単そうなものをつくらう」と、ものづくりの楽しさよりも、面倒くささが勝っていた。そうして選んだコーナーラックをつくり始めた。

昔やっていたこともあり、のこぎりや釘打ちの感覚はすぐに思い出せた。なんの苦もなく作業を終え、紙やすりをとりに向かった。「そうそう、最初は数字の小さい紙やすりだったな」と思い、紙やすりをとり、やすりの作業を始めた。三十分ほど削り続けた時だった。少し手が疲れ始め、どんなものかと木材をさわった瞬間、その滑らかさに驚いた。それと同時に、小さい頃の記憶がよみがえってきた。「懐かしい」と思いながら、夢中で手を動かした。全体にやすりかけ終えると、先生が「もっと大きい数字のやすりを使ってごらん。もっとつやつやになるから」と言った。紙やすりの数字がどんどん大きくなっていくことも、私の楽しみの一つである。やすりの数字が大きくなるにつれ、作品のさわり心地もそれに比例し良くなっていく。それが嬉しくて、やすりがけの作業は人一倍頑張った。そんな作業を毎時間続け、やすり終わった作品はとても滑らかで、達成感がこみ上げてきた。そしてニスを丁寧に塗り、完成した作品はつやつやピカピカと光り輝き、きれいでとても誇らしかった。

授業のふりかえりシートを書いているとき、「楽しかったな、またつくりたいな」という気持ちで心がいっぱいだった。その時の気持ちは小さい頃の私の気持ちと全く同じであった。正直、中学校に入学した頃は、「技術なんてやる意味なんかないでしょ。ものづくりなんて将来絶対やらないよね。」と友達と話していた。しかし、この技術の授業でものづくりの楽しさを思い出すことができた。

私にとって、ものづくりの楽しさは諦めず一生懸命取り組み、自分自身の手でつくる点にあると思う。作業中はもちろん大変で、嫌になることはあるかもしれない。しかし、自身の手でつくることで、最後までやり遂げる大切さや、丁寧に心を込めて作業する大切さに気づくことができる。そして、その経験は将来の自分の成長に必ず役立つと思う。また、この経験は自分のできることの幅を広げ、人生を豊かにしてくれた。私はこのような機会を与えてくれた技術の授業に感謝したいと思う。

作ったコーナーラックは大切に机の横においてある。少々歪んでいる部分もあるが、私はコーナーラックがどの棚よりも大好きだ。この経験を生かし、将来はものづくりに積極的に挑戦したい。この技術の授業での経験を忘れないためにも。



## 木馬と父

新宿区立西早稲田中学校 三年

### テッリンスイウ

「よし、完成だ。」簡単な作りの靴箱を作り終えた父がそう言った。私はただお疲れ様とだけ声をかけ、再び教材にペンを向ける。私の父は小さな建築会社の社長である。日曜大工で椅子から棚からなんでもかんでも作ってしまう。そんな父親である。辺りを見渡してみれば、視界のどこかに木材の薄い茶色がある。その内家全体が茶色に染まりそうだなと、少しだけ期待しながら、父が私のために作ってくれた棚に教材を入れ、目線を下に落とす。そこには教材を入れた反動で少し揺れている木馬があった。少し歪んだ形をしているその木馬は、父ではなく私の作った物だ。これは二年前の技術の時間、皆がカタログから中難易度の引き出しやティッシュボックスを選ぶ中、私は最高難易度の木馬に挑戦しようとしていた。ものづくりは嫌いではなかったが、私にできるのだろうか心配だった。やめとけと止める同級生や先生の手を振り払い、のこぎりを引き始めた。私ならできると自分に言い聞かせ、ただひたすらのこぎりを引く。触るとちゃんと痛かった木の角も、ベルトサンダーで丸みを帯びていく。釘に向かって太鼓のバチのように金づちを下ろす。次第に愛着が湧いてきて、この少しずれてる耳も、大きさが左右で少し違う顔も、

愛おしく思えた。馬にブラシをかけるようにやすりをかけて、馬の毛並みを整えるようにニス塗った。ニスのツンとする臭いに鼻が慣れてきた頃には、作りたての頃とは見違えるほど綺麗になっていた。それはまるで、一匹の木馬が華やかな服に着替えていく様だった。最初はやめておけと言われていた先生も次第に私を応援してくださり、私は自分に自信を持てた。私はニスが乾いた木馬を見て、誇らしく思えた。いま思えば、この頃から既に、私はものづくりが好きだったのかもしれない。私は木馬を持ち上げながら、誇らしい反面、不安も覚えていた。この私の数日間の作業を数時間でやって退ける父は、この木馬を見て何と云うのだろうか。木馬とすら思わないのではないか。机の上でちゃんと揺れる木馬を見て、私はそう思った。本当に出来たではないかと褒め称えてくれる先生を横目に、私はずっと父親のことを考えていた。コーナーラックを持つ友達といつもの通学路で木馬を持ちながら帰る。さすがに多くの人に見られるが、そんなことは気にならなかった。たまに聞こえてくる褒詞に、少し自信がついた。私はいつもより強気にドアを開けて、一段飛ばして階段を駆け上がった。あと数段という所で、釘を打っている音が聞こえてきた。二階のドアを開けると同時に、父の「おかえり。」という声が聞こえる。私は両腕を延ばし、



少し歪な形の木馬を見せる。

「これ、お前が作ったのか。」

父の問いに、私は下を向いたまま答えることが出来なかった。「こりゃ、いい出来だな。」

父のその一言を聞いて、私は口角を上げずにはいられなかった。再び釘を打ち始めた父は、「お前がこんな物を作れるようになったんだな。」と誇らしげに笑った。「父さんにとって、モノをつくる喜びって、どんな喜びなの。」

今度は私が父に問う。父は釘を打つのをやめ、金づちを床に置くと、私の目を見ながら言った。「俺は、心に残る人生の喜びだと思っているよ。」

私はその言葉を真顔で言う父に、尊敬の眼差しを向ける。再び釘を打ち始めた父の背中がいつも以上に大きく感じた。父さんが作り終えた棚をパソコンの隣に置き、教材やゲームソフトを敷き詰める。一番下の段に何を置くか迷っていた。すると、父が木馬を置いた。「これ一個だけじゃスペースが多いよ。」と私が言うのと、「これからもっと作ってほしいよ。」と父が言った。あれから三年間がたった今では、すっかり木工品も増え、中央にある木馬も相変わらず揺れ続けている。この写真立ても、小さな引き出しも、心に残る人生の喜びとして、今も胸に刻まれている。これからも心に残る人生の喜びを、作っていかうと思う。「これ以上作るなら、棚から作らなきゃな」と父が言い、少し笑いあってから、私は迷わず、棚を作り始めた。

## 調理実習で学んだこと

新宿区立西早稲田中学校 三年

平 泉 輝 将

「なんで家庭科の授業で調理実習をしなければいけないだろう」僕は気になって仕方がなかった。今の世の中、料理なんてしなくても困ることはないと思う。カップラーメンはお湯をかけるだけだし、近所のコンビニでは弁当だけでなく寿司やパスタなどの麺類、おでんなど様々なものが買える。しかもそのまま食べられるものがたくさんある。そんな中で料理の技術を学校で必ず習わなければいけない理由がよく分からなかった。

そして僕は料理が苦手でもあった。もともと不器用ということもあるかもしれない。しかし、そんなことでは言い訳しきれないほどひどすぎる。野菜も切ることだけでさえもしょっちゅう指を切ったりする。そしてそのせいで調理実習では何度も失敗を繰り返した。「センスがない」とはまさにこのことを言うのだと身をもって実感できた。

例えば豚の生姜焼きを作った時のことだ。僕は料理をするのは嫌だったが、おいしいものを食べることは好きだ。豚肉をフライパンに乗せると「ジュウ」という焼ける音がしてきたのと同時に、肉のいい匂いが教室を包み込んだ。そんな匂いに意識

を奪われ僕はぼんやりとおいしい肉をいっぱい食べる幸せな姿を想像していた。しかし、そのせいで僕は焼き加減のことをすっかり忘れてしまっていた。焦げ臭いにおいで現実の世界へ戻るもそこには、真っ黒になった肉とは思えないものがあつた。みんなと同じ器具、具材を使っても僕だけがうまくいかない。そんな理不尽さを感じながら黒い肉を食べつくした。

このことから僕は今まで食べていた食事の裏側にはそれを作る人の苦労があるのだと思つた。レストランのシェフなど僕がやってしまったら店はすぐにつぶれてしまうだろう。しかし料理をする能力は、そのような人以外の人たちにとって全く必要ないものだろうか。僕は将来一人暮らしをしたかと思つている。そんな時に一番必要なものは料理をする能力なのではないか。「腹が減つては戦はできぬ」という言葉があるがその通りだ。腹が減つていてはなにもできない。そしてそれを満たす料理こそ一番必要な能力だと思つた。

また料理はうまくできた時、すごい達成感を与えてくれる。僕は調理実習での失敗の後、料理を練習するようになった。母が作っているとところを観察したり、実際に作ってみたりした。そして今ではスクランブルエッグなど簡単なものだけだがおいしく作れるまで成長した。初めてスクランブルエッグをおいしく作れた時、自分で食べると今まで味わつたことのない快感が体を流れた。その時の言葉で言い表せない達成感には忘れられない。料理は完成した時の達成感で食べる人だけでなく作る人も幸せにしてくれる。

料理とはそれを仕事にしても必要なものだ。そしてそれに加え食材に関する知識も大切だ。調理実習はそれら

を一気に身に付けることができる一石二鳥な授業だったのだ。「なぜ家庭科で調理実習をするのか。」その答えにもっと早く気が付き、全力でやっていけば楽しい時間を過ごせただろう。終わってしまった今ならそう思う。

調理実習は僕に様々なことを思えてくれた。関係のなかった僕と料理を引き合わせ、料理の重要性や楽しさを教えてくれた。おかげで今は、「料理は生活の豊かさに明かりを照らしてくれるもの」、そう思えるようになった。これからも料理は練習を続け上達させたい。今はやっとごはん、みそ汁、おかずと一食を揃えられるようになった。しかし、まだまだ失敗する。僕が昔調理実習での失敗から料理の楽しみを知つたように、失敗から学べることはたくさんあるはずだ。料理が苦手な僕だからこそ学べるものはたくさんある。そう信じてこれからも料理を続けていきたい。そして僕の大好きなハンバーグをおいしく作って家族に食べさせたい。



## ボランティアから生まれる感情

墨田区立文花中学校 三年

石 島 咲 良

募金活動、交通安全の呼びかけ、社会貢献活動など私はさまざまなボランティアに参加してきた。その中で印象に残っているのは五年間参加した山梨県の福祉作業所で行われるワークキャンプだ。作業所では普段、障害のある方々が鶏の飼育や椎茸栽培、菜園を行い、それらを販売している。しかし作業所の方々もお盆の時期になると帰省をする。それによって人手不足になる作業の手伝いをするのがこのキャンプの役目だ。

このボランティアの良さはいろいろある。

第一は魅力あふれる人たちに会うことができること。そもそもこの企画は一つの団体が開催しているのではなく、記念館、教会、保育園、児童館などが共催をしている。だからこれがないと会うことの出来ないような人たちとも会えるし、参加者の年齢制限がないので親と一緒に一歳の子が来たりもする。だけど皆同じ意思を持ってその場所に集まっている。そんな人たちと協力して味わう達成感と喜びは私の人生において最高の経験になった。

第二は働くとは何か身を持って体験することができるこ

と。正直、ワークキャンプでの仕事は肉体的にも精神的にも辛いものが多かった。原木運びはたぶん一生忘れることはないだろう。おいしい椎茸が生えてくると思うと頑張る気持ちが湧いてきたが運んでも運んでも終わらない無限ループには弱音が出た。鶏への水やりも行き始めの何年かはまだ給水設備が整っていない小学校二年生だった私も高校生の人や大人と一緒に何度も道の途中で休みながら長い距離を運んだのを覚えている。だが産まれたての鶏のたまごを触ることで辛かった気持ちが感動と感謝と喜びの気持ちに変わる。毎日三回たまごをとりに行くたびに生まれるこの気持ち。そんな束の間の幸福を味わうために仕事をするのではないかと子供ながらに感じた。

第三は大人の偉大さがわかったこと。そもそもこういうキャンプをやるうと思っただけで実現させたことがすごいし、辛い作業が続いて疲れているはずなのに、そんな顔一つせず笑って励ましの言葉をかけてくれる。攻撃してくる鶏たちから守ってくれる。私はキャンプの間に何度もこんな大人に将来自分もなれたらいいなと思った。

第四は人には向き不向きがあるということ。作業所にはいろいろなタイプの人がいて、男性で力作業が得意な人は、原木や鶏のエサを運んでいて、下半身が不自由だけど手先が器用で色彩センスのある人は、布ぞうりを作っている。歌を歌うことが大好きで敷地内をいつも走り回っている人は、避暑地にあるお店にたまごを運ぶ仕事をしている。それぞれが自分の力を生かすことが出来る仕事を与えている寮母さんとしての仕事をしている人は、その人にとってとても向いている

仕事だと思ふ。当たり前のことだけど改めて人は仕事をする義務を背負っていて、その人がどんな障害を持っていてもそれは変わることはないのだとキャンプの中でいろいろな人たちと出会って感じる事ができた。

私は将来つきたい仕事が決まっていけない。このボランティアを経験して、自分が今まで理解していた仕事に対する甘い考え方を変える事ができた。どんな仕事にも大変な面があつて、それを乗り越えられるかは自分の努力しだいだし、頑張つても自分には向いていなくてうまくいかないこともあると思う。だからといってすぐに諦めるような大人にはなりたくない。私はボランティアで出会えた人たちのような人に愛を持って接することが出来る大人に将来なりたい。そしてこのようなボランティア活動に参加することは自分にとってすばらしい経験になることをいろいろな人に感じてもらいたい。

## 私の夢

墨田区立吾嬬立花中学校 三年

山下 夢 翔

私の夢は物心ついた頃からプロサッカー選手でしたが今は料理人です。

私は父の影響で二歳からサッカーを始めました。私はどんなサッカーが好きになっていき、今でもサッカーは続けて

います。そんな私が料理に目覚めたのは、家庭科の授業が始まった、小学校五年生の時でした。家庭科の授業が始まって最初の調理実習で私は料理の楽しさに気づきました。それから私は母の料理を手伝うようになりました。中学生になると料理の腕も上がっていき、夕食を作ってくれと頼まれることもありました。去年からは、両親の誕生日や父の日、母の日などは日ごろの感謝をこめて料理を作っています。そして最近料理を作ることで人が喜んでくれる、感謝もできるということに気づき、私の夢は自然にサッカー選手から料理人へと変わっていったのです。

私は料理人という夢の実現のために何をすればいいのかを考えました。料理人になるためには、料理の練習はもちろん、衛生面の知識やその料理の調理工程についても勉強しなくてはなりません。しかし、私は今まで一般的な物しか作ってこなかったし、衛生面のことは手を洗う位しかしたことがなかった。なので少し危機感を感じました。そのことを母に話すと専門学校という答えが返ってきました。

「そうか、専門学校ならいろいろ学べるはずだ。」

と思いましたが、私は高校生ではサッカーを続けたいと思っていたので、どうしようか迷いました。そこで、高校卒業後に専門学校には入れないかを調べたところ入れるとのことだったので私の進路は希望ですが決まりました。中学校を卒業後サッカー部のある高校に進み、高校卒業後に専門学校へ進むという希望です。その進路希望が決まった時、少し夢に近づいた気がしました。

私は以前、中学校でいろいろな職業をしている方達を招い

て話を聞くというイベントでスポーツ栄養士の方の話を聞きました。話の内容は、スポーツ栄養士の仕事内容や食事の際に気をつけること、栄養素のことなどでした。私はスポーツをやっていたのですごくためになりました。その中でも特に勉強になったのが『まごは(わ)やさしい』という言葉です。孫はやさしいとは、食事のメニューに入れた方がよい食材の頭文字をとったもので、『ま』は豆、『ご』はごま、『は(わ)』はわかめ(海藻類)、『や』は野菜、『さ』は魚、『し』はしいたけ(きのこ類)、『い』はいも類です。このまごはやさしいの食材を一日ですべて摂ることによって骨や筋肉を作ったり、体の調子を整えたりするだけでなく、疲労回復や病気の予防にもなると知って、私は料理を作る際に参考にしています。これもまた、夢に一步近づいた気がしました。

そしてひそかに考えていたことが、もし夢が叶ったらどんな料理を作りたいかということでした。私は世界の料理に興味がありました。そこで考えたのがいろいろな国の代表的な料理のよいところを混ぜ合わせ、何か新しい、新感覚な料理を作れないかということでした。その考えを出してからは、ひまな時間のほとんどがそれを考える時間になっていました。その時間で考え出した新料理は、実現不可能でおいしくないかもしれません、その時間はとても楽しいものでした。そして私が最初に考え出した新料理は、クラムチャウダーの具材とクリーミーな味をピザの生地のにせた『クリーミーピザ』です。おいしそうだと思いますか。

私は、人々に幸せと驚きを与えられる料理人になりたいです。そして今までもこれからも助けてくださった人達に料理

という形でお礼ができる人間になりたいです。

私の夢への道はまだ始まったばかりです。夢を実現させることはそう簡単なことではないことは知っています。いくつもの困難が待ち受けていることでしょう。しかし、私はその困難に今までの経験と知識を持って、正面からぶつかって、突破していきたいと思います。

## 責任と喜び

江東区立大島中学校 三年

古川 智加

「この仕事の一番大切な事は、子供たちの命を守ることです。」

これは職場体験中に園長先生から言われた言葉です。今回私が体験したのは、命を守る責任のある保育士という仕事でした。

私が保育士を体験したいと思ったのは、子供が好きで仕事がとても楽しそうだと思ったからです。実際、保育士の仕事はとても楽しく、あっという間に過ぎていきました。読み聞かせをすれば、静かに座って聞いてくれるし、私と遊ぼうとたくさんの子供たちが集まってきてくれました。ケンカをしている子供たちの仲裁をするのは少し大変でしたが、泣いていた子が笑顔になったときは、本当に嬉しかったです。しか

し、保育士はただ楽しいだけの仕事ではありませんでした。そのことには、避難訓練で気づかされました。

避難訓練。放送が流れると先生方は声を掛け合いながら子供たちを園庭まで連れていきました。小さい子のクラスの前生は両手に子供を抱え、園庭に出ていきました。私もその場にいたのですが何もすることが出来ず、先生たちを見ている事しかできませんでした。その後、園長先生に言われたのが冒頭にも触れた「この仕事は子供たちを守る事」ということでした。その言葉を聞いて保育士とはただ子供が好きという理由だけで勤まるものではないのだと気づかされました。

その晩、母に避難訓練のことを話すと、八年前にあった東日本大震災での話を教えてくれました。その時の園長先生は最後の一人の子の親を迎えに来た朝方まで子どもたちを見守ってくれていたそうです。確かに子供たちの事を思うと、そうするのが一番いいことだと思いますが、即座に行動が出来ると言う事は、大変すごいことだと思います。

他にも保育士の仕事はたくさんありました。例えば、お部屋のお掃除やおもちゃの消毒、行事の企画、保護者の方との連絡帳でのコミュニケーションなどです。たくさん仕事がありました。今思えばそれをすべて「子供たちを守る」ということにつながっていくのだと感じました。

保育士の仕事を知れば知るほど大変だと気づかされました。そこで、私はなぜこんなにも大変な仕事を続けていけるのか園長先生にインタビューしてみることにしました。先生は、「子供たちの日々の成長を傍で見られることと、保育園楽しかった、と笑顔で帰っていくのを見られるという喜び

があるからです。」と、答えてくださいました。その言葉を聞いて私はハッとしました。それは、私が職場体験中ずっと感じてきたものだったからです。私が職場体験を終えて学校に戻る時「お姉さん、またね。」とたくさんの子供が見送ってくれる時、確かに喜びを感じました。

保育士は子供の命を預かるという責任のある大変な仕事です。

でも保育士の方々は、その中にも自分なりの喜びを見つけてやりがいのある仕事に変えているのだなと感じました。私もいざれ仕事に就きます。きっと初めは大変だと感じるはずですが、でも、そんな時に苦労している面だけを見るのではなく、保育士の方々のように喜びを見付けて、やりがいのあるものになりたいです。自分の仕事に誇りを持ち、大好きになりたいです。

私は中学三年生になり、自分の将来について考えなければならなくなりました。今まではどんな仕事に就くのかという事ばかり考えていましたが、その仕事に就くのが最終の目的ではなく、そこからどうやって仕事をしていくのかということも大切だと気づかされました。私は、まだ将来就きたい職業は決まっていけないので、今は目の前にある勉強や学校の委員会などの仕事を精一杯やって、自分にあった仕事を見つけたいです。



## ボランティアを通じて

江東区立深川第七中学校 三年

沼田陽菜

「着いたぞ」父に言われてその倉庫に入ったとき、私はその服の多さに衝撃を受けた。

マリ共和国へ送る古着をたたんでダンボールにつめるボランティアに日曜日だったからという理由でいところ一緒にいられるがままに行ったのがきっかけだった。

しかし、いざ倉庫につくとビニール袋にパンパンに積み重なった洋服や靴の多さに「これ、全部たたむのか」とげんなりした。でも、さらに驚いたのは周りに私と同じくらいの子がせっせと古着を運んだりたたんだりとても楽しそうに仕事をしているのだ。それに刺激を受けて私も大量の服をたたんだのを覚えている。

しばらくの間古着をたたんでいると、隣にいた高校生くらいの人に「今何才なの？」と話しかけられた。もちろん知らない人に話しかけられてとてもびっくりしたが、それは最初だけでその後は、学校や習い事の話などをしてとても楽しかった。今思うと高校生と話したのはもしかしたら初めてだったかもしれない。

そう考えるとボランティアは他の人を見て刺激を受けた

り、全然違う年齢の人と話す環境があるという隠れた魅力があると思う。

また、私がかもう一つこの活動を通して衝撃を受けたことがある。それは古着たたみに行った数年後に父から聞いた話だ。マリ共和国の人々は古着が送られてくると、もちろん喜ぶらしいが、古着と同じくらいに古着を入れていたダンボールも喜ぶらしい。私は意味がわからなかった。ダンボールの何がそんなにうれしいのか？そんな私の考えを読みとったかのよう父が説明をした。「現地の人たちはダンボールを3〜4枚くらい薄くさいてメモ帳として大切に使うんだよ」と、ようやく意味が分かった。ダンボールで喜ぶなんて誕生日にプレゼントより包装紙を気に入って喜んでる妹みたい。と一瞬見下しそうになったが、そうではなく日本とは違い、資源が少なく紙でさえ、工夫して集めることや服も寄付にたよっているマリ共和国の厳しさが一気に見えたような気がした。

私たち日本人がどれだけ恵まれているかを私はこの活動を通して知ることができた。夜寒かったら私たちは当たり前のように毛布と暖房をかける。「なんでこんなに寒いんだ！」という人もいるだろう。だが「暖をとれるだけありがたい」と思う人は少ないだろう。それは世界的に見て、日本が豊かな国である証拠だと思ふ。

マリ共和国の人々は現在も経済的に貧しく他の国の援助が必要不可欠だ。だが、政府



が援助をすると、とてもお金がかかるうえに、日本とマリ共和国の関わりはあまり深くないのでマリ共和国に補助される手厚さはあまり大きくはないかもしれない。しかしそれをボランティアが行うことで手厚く補助される。

こうした活動がもっと増えれば、世界各国がもっと平和で明るくなるのではないか？

学校では学べないリアルな世界の厳しさをボランティアを通して知ることができた。

## 情報技術と地球環境

北区立赤羽淵中学校 三年

進藤 千歳

私たちは電子機器をうまく活用していく必要があると思います。

スマホという略称で親しまれるスマートフォン。技術の進歩により、現在の時刻、天気、検索、メッセージ、あらゆることがこの電子機器一つでできる時代になりました。私はスマホがあることにより、朝六時半にアラームをセットし、天気を確認し、最近の友達の様子などをチェックして、学校から帰ると宿題の分からないことを検索したり、好きな音楽を聴き、気になる動画を見たりすることができます。私はスマホのおかげで充実した毎日を送れています。このように、私

たちの生活は技術により利便性が高まり、豊かになってきています。意識してみると、電車に乗るほとんどの人がスマホに夢中でした。たくさんの人々に広まるスマホは人類における偉大な発明だと感じしました。

スマホには様々な利点があります。例えば、紙の代わりに電子メールを使うことで紙資源を節約することができます。これにより伐採される木々の量を抑えることができるので、森に住む動物たちが安心して生活することや、私たちが新鮮な空気を吸うことができるように繋がる。私はそれがとても素敵だと思いました。

他にも、スマホのおかげで連絡をとることが以前よりも楽になり、優れたものになりました。私の家族は祖父母に簡単に使いやすいスマホを勧めました。そうすることで今は、遠く離れて住む祖父母と手軽にビデオ通話ができるようになります。固定電話では分からなかった二人の姿を見ることができます。物理的に祖父母の家に寄らなくても二人の状況を把握できるようなり安心したと父は言っていました。私は祖父母と声だけではなく目で話すことができとてもうれしいです。

しかし、便利な一方で、スマホには使い過ぎの問題があると思います。スマホではSNSなどを使うことができ、ずっとSNSをしていてスマホを手放せなくなるというような依存症になってしまいうケースが見られます。このようになると手放したくても手放せず、生活リズムを乱す原因になります。生活リズムが崩れると脳の発達や成績に影響を及ぼします。私はこのような結果にならないよう節度をもってスマホを使っていこうと決心しました。

街を歩いていると新しいスマホの広告をよく見かけます。年々進化したスマホが生み出され、それらを買うたびにいったいどれほどの使われたスマホは処分されるのでしょうか。気になって調べたところ、一年間に世界で捨てられるスマホはおよそ一億五千万個でした。私はこの膨大な数に驚きました。そして、スマホなどの電子機器は燃やすと有害物質を出すことをニュースで知りました。私は有害物質を排出させるのはよくないと思うので技術で習ったようにリサイクルをすべきだと思いました。教科書を読んでもみると、このような問題を改善するため、資源有効利用促進法という法律があることを知りました。まだ、PCグリーンラベルという環境配慮の基準に満たしたパソコンもあるそうです。

これから大学生になった時などにパソコンを購入するときには、このマークのついている商品を探すことを心がけようと思いました。

家族に捨てられてしまう話を私がしたところ、母が「都市鉱山からつくる！みんなのメダルプロジェクト」について語ってくれました。これは来年行われる東京オリンピック、パラリンピックで使われるメダルを要らなくなった電子機器や家電製品から作るというものです。私は、日本がこのような活動をしていくことを知りとても感動しました。なぜなら世界的な行事でこの活動をするにより、より多くの人に使い終わったスマホなどの電子機器の良い処理の仕方を教えられると思ったからです。私はこのことをいろんな人に伝えたいと思いました。

父からは良い製品を作るためにはたくさん技術者が頭を

ひねり何度も作って試して消費者のニーズに合うものを作らなければいけない。作りすぎてもいけないし、環境のためだからといわず少すぎると収入が減ってしまうことを教わりました。モノを作るとはとても難しいことなんだとさえさせられました。

これから地球環境のことを考え、製品のメリットデメリットを理解し、モノを買いおうと強く思いました。

## 挑戦から始まる世界

北区立稲付中学校 三年

伊藤沙保

私は、しっかりとした将来の夢はありませんが大きき二つの道で迷っています。まず一つめは「医者」になり、人々の命を救うという形で社会の役に立つこと。二つめは、今は存在していない職業に就くことです。また、最近ではグローバル化が進んでいて、インターネットなどですぐに世界とつながることができます。だから海外で仕事をするなど他の国とも広く関わっていききたいです。

どんな職業でも働くことはとても大変なことだと思えます。私は自分の夢を叶えるために道の幅を広げて本数を増やしていきたいです。道の幅を広げるといことは、ボランティア活動や学校行事などのたくさん経験を通して視野を広げ

ていくということです。私は、生徒会活動や、中学校を通して出会った多くの人と関わることで視野も広がり、楽しさが増えたと思います。道の本数を増やすということは、知恵を増やし技術を身に着けることで選択肢を広げることです。私は今までに本数を増やす場面に直面したことがなかったのですが今まさに高校受験という場面で直面していると思います。本数を増やすこの時期はこれから続いていく人生の中で重要性の高い時期だと思います。だからしっかりと取り組み成功で終えたいと思います。

また、今現在に存在していない職業に就くということは、とても面白いことだと思います。もちろんまだ存在していないのでどんな職業ができるのか予測することはできても確実にわかることはないので大変な仕事になると思います。しかし新しくできた職業に就いて自分たちが基盤を作り、それが受け継がれていく可能性があるのでとても素晴らしいことだと思います。私は数年前に世界で最初の女性医師となった方の本を読んだことがあります。今では医者の中に女性がいるということは当たり前のことになっていますがそれは女性という道を開いてくれたからです。私はその本を読んで、どんなに難しいことでも道はずれなければ不可能はないと気が付き、挑戦することの大切さを学びました。たくさん挑戦を重ねることで困難なときに立ち向かう壁が、ベルリンの壁の高さから少し大きめな家の壁と見方も変わってくると思います。

私は医者を目指し、夢を叶えることができたなら、発展途上国などで働きたいです。国を出ていくということは、文化、

言語、環境も違うので、コミュニケーションを取ることが大変だったり、文化の違いで生活すること自体が難しくなってきたりすると思いますがこのようなときに、自分が経験してきたことを生かせるようにしていきたいです。挑戦したり経験したり何回も同じことを繰り返したら体にしみこんでいくものですが、チャンスは何回も巡ってくるものではないです。だから一回の経験で多くのことを吸収していきたいです。

私は中学校生活で様々な活動に積極的に取り組むことを念頭に置いてきました。生徒会の活動では学校のため生徒のためは何をすべきか考えたり、生徒会を通して行った区の活動では、他の学校の人と関わりながら課題を見つけ、解決策を考えていきました。また、このような活動を積極的に行うことは楽しいことで多くの人と関わりを持てたり、活動が一つ終わると達成感で満たされていきます。ほんの少し勇気を出し挑戦するというだけで、普通より困難はあるけれどそれと比例して楽しさややりがいを感じられました。

挑戦することで視野を広げ、経験を積むということは、日常生活で野菜炒めを作るとき、野菜の使い方を知ること野菜や料理への視野が広がり、作ることを経験し身に着けられる。というような小さなことから、世界へ広がる大きなことまで応用が利くものだと思います。これから先、今よりも素晴らしい技術や科学が発展していきAIとの共存も遠くないと思います。時代が変わっていても、道の幅を広げ本数を増やすという一連の流れをさまざまな形で活用していきたいです。

## 新しい社会とスマート農業

北区立稲付中学校 三年

福島 有紀

今後十年から二十年で、自動化により今ある職業の約半分が無くなってしまふ。そんな話をきいたことはないだろうか。AIやロボットの研究が急速に進められ、私たちの生活も変わってきている。IoTで全ての人とモノがつながる、ソーサエティ5・0という情報社会を超える新しい社会も、少しずつ現実になりつつある。

中学校の技術・家庭科の授業で、技術が人間の夢や願いを実現してきたことを知った。今日、身近な生活の中にも多くの技術が生かされ、日々進化を遂げている。少し前の時代では考えられなかったようなことも簡単にできるようになっていく。

皆さんは「スマート農業」という言葉をご存知だろうか。「スマート」とは、ハイテク、つまり最新技術のことで、「スマート農業」は、最新の技術や機械を使い、農作業の人手を少なくし、すぐれた農作物を作ることを目指す農業だ。私は、スマート農業を通じて、新しい技術や新しい働き方、そして新しい社会について、考えていきたいと思う。

日本で古来から親しまれ、食べられてきた主食、それは言

うまでもなく米だろう。弥生時代から続く稲作も、スマート農業で大きな変化を遂げるに違いない。しかし、実は米作りの作業は、一九六〇年代のなかば頃から機械化が進んで、働く時間が短くなり、生産力も高くなった。このことはご存知の方も多いだろう。では、その先にあるスマート農業が目指すものとは何だろうか。

機械化された農作業、これにICTなどの最新技術が加わることで、米作りは、新しい時代に向かっていく。そうしてスマート農業は、農家も消費者も満足する農業を目指す。具体的には、人工衛星を使って自動操縦で動くトラクター、米の生長を正確にとらえるドローン、また田植えの時期には自動運転で動く田植え機、収穫の時期には稲刈りをしながら味や収量が分かるトラクター等の利用が期待されている。センサーでとらえた情報は、農家がスマートフォンで見ることができる。

今までの米作りでも、機械化が進み、作業がはかどり、楽になった。その一方で、機械を使いこなすための経験が必要で、作業を記録する手間もかかっていた。しかし、農業機械の自動化によって、少ない人間でも運用でき、操作をおぼえればだれでも作業できるようになった。また、作業記録が同時につけられるため、作業のデータ化も簡単だ。農家にとって



は、さらにとれる量が増え、品質が良くなることで、収入が増え、将来に希望がもてるという利点もある。消費者にとっては、どのように作られたのかが分かる、おいしい米を食べることができ、安心・安全な食生活を送ることができ、こともつながる。こうして、スマート農業は、農家も消費者も満足する農業へとつなげていく。

しかし、そんなスマート農業にもまだ課題はある。まず、機械がまだ高価すぎるのだ。より安くなって身近になれば、利用も進むことだろう。また、スマート農業の成果がどれくらい期待できるのかもあまり知られていない。これをより多くの人に知ってもらえたら、スマート農業も身近になるし、人工衛星やAIの技術をもったより多くの会社もスマート農業へと進出し、より急速なスピードで発展していくことだろう。まだ実現への道のりは険しいようだ。

それでも、その時代は着々と近づいてきている。近年は有名なシリーズ小説にスマート農業のことが登場したり、スマート農業に関する絵本が出版されたりと、注目度が上昇しているのも事実だ。いつしか稲作に限らずスマート農業で日本や世界が劇的に変わり、それがその先の当たり前になっていく。そんな時代が楽しみだ。

現在あらゆるところで機械化が進み、人間が担う職業も減ってきた。これから来るとされるIOTで全ての人とモノがつながる社会は、新しい技術が結集して生まれる社会だ。その社会で働くことは、どういうことなのか。私は、その人らしさや個々の価値観を守りながら働けることだと思う。スマート農業のように、将来に希望がもてる、世代を超えて働

ける、互いに尊重し合える環境で働くことができる。そして、それは一人ひとりが快適で活躍できる社会を実現させるに違いない。

新しい技術は、常に人々の生活に変化をもたらしてきた。私も新しい社会に向けて、それを知り、いつしかそれを切り開くような人間になりたい。

## 受験生の決意

北区立稲付中学校 三年

森 美 郷

私はこの夏休み、学習へ真剣に取り組むことができませんでした。私は塾に通っておらず、自分で時間割を立て、計画的に学習するつもりでした。しかし、思うようにいかず夏休み終盤へかかりました。外出先から家へ戻ってきて、友達と会い、話を聞き、自分の不真面目さに気づかされ、心に釘を刺されたような痛みが走りました。

私は以前から定期試験のときはあと数日というところで勉強を始めます。前からこれはだめと思っても、どうしてもそうしてしまう自分でした。しかし、この受験の年の夏休みの過ごし方については自分でも自分自身を許せないくらいとても後悔しています。なので、私は自分自身に対するルールを作りました。それは、やはり我慢が苦手な私なので夏休

み明けの始業式の日から始めようと思っと思っています。そのルールは、慣れている人からするととても簡単に思えるかもしれませんが、物事をなかなかちゃんとこなさない私にとっては少し大変なことです。

一つめは、規則正しい生活をする事です。

私は休みであっても、休みでなくても、寝る時間が毎日異なり、早寝早起きのできる体になれませんでした。休日のほとんどは昼食の時間に起きる生活でした。しかし、私は今年受験生であり、体調管理が最も重要だと先生や先輩から聞きました。試験日の直前に体調を崩してしまったという話も聞きました。私はたまにこの不規則な生活により、疲れがたまり、いきなり体調を崩すことがあるので、この話を聞いた時は、「他人事ではない・・・。」と思いました。なので、私は以前から自分自身が一番気になっていた生活リズムの整った日々を送ることに決めようと思いました。

二つめは、スマートフォンを日曜日以外は一切使用を許さないことです。これについては、私が以前からずっと気になっていたが実践できなかったことです。親からも注意され自分でも分かっているはずなのに体が勝手に動いているかのように止められませんでした。新たな気持ちの切り替えとして、夏休み明けが一番適していると思い、実践しようと思いました。



三つめは、放課後は友達と一緒に学校などの同じ空間で勉強するという事です。私の友達の中に、私と同じように塾に通っておらず、夏休みの過ごし方に悔やんだ人がいます。その友達と話合って、家では一緒に勉強に集中して取り組めないで、学校などで授業の後も授業と同じように勉強しようということになりました。私と同じ環境の中で学習すると仲間がいるのだと、思えることにより学習へより積極的に取り組めると思い、これをルールに決めました。

四つめは、家で平日八時から十時までは必ず勉強するという事です。この時間は私が一番テレビのドラマを見たいという時間帯ではあるが、寝る前の一番目が冴えている時間帯だと思えます。なので、この時間帯に勉強しようと思いましたが、以前、一度だけこの作戦を実践しようとしたときはどうしてもテレビの誘惑に勝てず、慣れることの以前に始めることさえも程遠かったです。この夏休み明けを機に、スタートダッシュとして実行しようと思えました。学習に対する心構えは、このたったの二ヶ月で大きく変わったと思います。このルールの多くは、以前挑戦し、失敗に終わったものばかりです。最初は計画通りにいくだろうと思っていた自分が、自分にとっても甘かったのだと気づき恥ずかしかったです。なかなか思うようにならず、結果として諦めるばかりでした。今思うところという自分が憎いです。夏休みの終盤になり、やっと現実の自分と向き合うことができました。しかし、「今更気づいてももう手遅れだ。」と思い、落ち込んでいました。そんな中、放課後に一緒に勉強すると話し合った友達は、「夏休み明けからがスタートだ」というひともいるよ。」と元気づ

けてくれました。私はそれを聞いた瞬間「自分に負けてはいられない。」と思いました。このルールを思いついたのは、その言葉を聞いてからです。

この作戦を実施し、自分をコントロールできるかを家族へ見せ、安心させたと思います。

そして、今まで以上に学習への意識を高くもち、これからの将来に向けて精進していきたいと思えます。

## 勤労留学から学んだこと

荒川区立第七中学校 二年

川村 真歩

私は勤労留学を体験するまでは、はっきりと具体的な将来の夢が決まっていませんでした。小学校の卒業式では「図書館司書になりたいです。」と発表したけれど、本当になりたいわけではなくただなんとなく言っただけでした。周りの人の中には、はっきりと決まった人は数人いるだけで残りの人は自分と同じようにまだ決まっているわけではなかったのです。将来について真剣に考えようと思わなかったのです。ただ人々の役に立てる仕事に就きたいとは考えていました。しかし、私は勤労留学を体験した後に人々の役に立てる仕事について考え直しました。

私の勤労留学先は、近くにある銭湯でした。銭湯を利用し

た事はあまりなく関りが少ない所でしたが、接遇の時間帯になるまでには体験が終わるので掃除するだけのイメージでした。実際に、掃除するだけでしたが、イメージとは違い、脱衣場やお風呂場の鏡や窓ガラスなど掃除する場所が何か所かありました。またその銭湯の人が掃除のやり方など教えてくれました。私がその体験先で学んだことは主に3つあります。まず最初に学んだことは「好きなことを仕事にするということ。」です。勤労留学生では、毎日最初に動画を見せてくれました。一日目に見た動画から私は、仕事は頑張るためには、「やりがい」というものが大切だけれども、「やりがい」というのは好きなことをやる仕事に就かなくても、その仕事を楽しんで、一生懸命取り組んでいるかでもつことができるということが分かりました。また銭湯の人も「好きなことを仕事にすることだけが大切ではない。」というふうなことを教えてくれました。

次に「ただの掃除も人のためになっていること」ということも学びました。銭湯は定休日以外毎日たくさんのお客さんが来ます。たくさんのお客さんが来るということは毎日お風呂場や脱衣所が汚れるということです。もしその汚れた所を毎回掃除しなかったら次の日に来たお客さんは嫌な気持ちになり、もう来たくなくなるかもしれません。また、五日間の一日だけ学校で勤務しました。その時は毎回学校はきれいにしてくれている主事さん方と一緒に普段はやらない体



育館の電灯の掃除や学校の周りの清掃などをやりました。最後に主事さんは、「もし今日やった事を誰もやらなかったら終業式に来る皆や学校の前を通る人々は嫌な気持ちになってしまう。やっても感謝をされることはないけれどやらなかったら怒るし嫌な気持ちになるよね。だから皆が嫌な気持ちにならないように毎回たくさん掃除をしているんだよ。」と話してくれました。その話を聞いて、だから銭湯も毎回鏡ふきなど細かい所までいいねいに仕事をしているということが分かりました。そして主事さんの話を聞き、銭湯で働き「全ての仕事有谁かのために役立つって役に立ってない仕事なんてない。」ということ学びました。普段どこかでお世話になっている医師や警察官、先生方や栄養士の方々、楽しませてくれるキャストの人達やテレビ関係者の方々、またいろいろなお店の人々。そして関りが無いけど社会のために働いている人々、いろいろな職業がいつでもどこかしらで誰かの役に立っているということが分かりました。

五日間の勤労留学をして「好きなことを仕事にする事について」、「ただの掃除も人のためになっていること」、「全ての職業が役に立って役にたたない仕事はない」ということを学びました。それらの事を学び、役に立たない仕事はないから好きなことではなくても、自分に向いている仕事をゆっくり見つけていこう。そして、何かの仕事に就いた時は一生懸命働き、楽しめるように、やりがいを持てるように頑張っていこうと思いました。また、五日間の勤労留学で学んだことを将来、仕事を通して誰かに伝えられるようにしていきたいです。

## 縁の下の力持ちになるために

江戸川区立松江第五中学校 三年

村山 想

「結婚おめでとうございます。」小さいころからよく遊んでくれた従姉のお姉さんが2年前に結婚しました。「想ちゃん来てくれてありがとう。楽しんでいてね。」とお姉さんは最高の笑顔で迎えてくれました。その結婚式は華やかでもキラキラしていて、参加した全員が幸せに満ちた時間を過ごすことができました。

私は小学生の頃からウェディングプランナーになりたいという夢をもっていました。その結婚式に参加したことでその夢を実現するためにどうすればいいのかより真剣に考えるようになりました。

中学二年生で職場体験があり、先輩からいろいろなことを聞き、その中に結婚式場での体験もあることは知っていました。私は迷わずに結婚式場を希望しました。たった五日間で、私が想像していた結婚式場の華やかさとは違う面をたくさん体験し、見ることになりました。

最初に指示されたのは、厨房の隅で洗いあがったお皿を一枚一枚拭く作業でした。結婚式に参加するお客様にお出しする料理を、素敵に盛り付けするためにもきれいなお皿でなけ

ればなりません。汚れてはせっかくの結婚式もだいなしになってしまいます。私は一枚一枚確認しながら心を込めて拭き取りました。また、自分がテーブルマナーについて理解していなければ、お客様に失礼になってしまいます。指導してくれたマネージャーさんから、テーブルマナーを一から教わることができました。特に辛かったのは、生け花用のお花の茎を切る作業でした。職場体験は一月の終わりで特に寒い日でした。お花を長持ちさせるために、水の中で茎を切る必要があり、手が冷たくかじかんでしまいました。でもこの花が式場を華やかに飾ってくれると思い、頑張ることができました。

私はこの職場体験を通して、ますますウェディングプランナーの仕事に興味をわき、従姉のお姉さんから改めて話を聞きたくて連絡を取りました。お姉さんは五月に生まれた赤ちゃんをあやしながらか結婚式についての話を聞かせてくれました。

旦那様と相談に行ったのが式の約一年前で、専任のプランナーさんと何度も打合せをしたそうです。式の流れや招待状の文言、お花の種類や料理について等、打ち合わせることは本当にたくさんあったそうです。でもその一つ一つに対して、丁寧に笑顔で対応してくれ、急な変更に対しても、二人のイメージに近づけるように一緒にプランを練ってくれたそうです。

自分の体験や従姉のお姉さんの話から、私の将来の仕事はウェディングプランナーで決まりです。表舞台に立つことはないですが、お客様が一生で一番とっていい輝ける場所です。

喜んでもらい、そして一緒に仕事をする仲間が必要とされる人材になりたいです。新郎新婦のお二人や招待客の皆さんが大切な一日を幸せに楽しんでくれ、その大切な思い出の中に、ずっと私の仕事の一部が残っていると思うと幸せな気持ちで一杯になります。

まだまだ経験不足で、もっと勉強して身に付けなければならないことがたくさんあると思います。優しく人に接することや仲間を大切にすること、時には我慢することも必要になると思います。そのために努力を続けていきたいです。もし、ウェディングプランナーという夢が叶わなくても、積み重ねた努力や相手を思いやる心はどんな仕事でも、生活の中で私に関わる全ての事柄に必要になると思います。私はいつでも誰かの「縁の下の力持ち」になれるよう自分を成長させていきたいと思えます。



## 職場体験やボランティア活動で得たこと

調布市立第八中学校 一年

山口 朋佳

夏休みは意外にも短いものだった。宿題や用事をすませていたらいつのまにか終りが近づいていた。そんな夏休みに私はひとつの体験をした。ボランティア活動に参加したのだ。

山口さん、と名前を呼ばれ返事をした。私はボランティアをする会場に来ていた。私が参加したボランティアは地域夏祭りの手伝いをする、というものだった。普段は参加する側の自分が夏祭りのために準備をし、来て頂いた人が楽しめるようにする、というのは少し不思議な感じがした。ボランティアをする会場で言われたある言葉がとても心に残っている。それはこんな言葉だった。「こちら側が楽しまなければ来て頂いた人に楽しんでもらえないでしょう。みなさん、笑顔でがんばりましょう。」

私はもっと厳しくて大変だと思っていた。しかし、この言葉聞いて少し安心できた。

グループに分かれて活動が始まった。私は綿菓子を作るグループになった。綿菓子を作るのは初めてで、あまり上手にできなかった。しかし、様々な人に助けられて綿菓子を作ったり、機械の掃除をしたりすることの大切さを学んだ。人は

一人では生きていけないなと思った。誰かに助けられて生きているのだと実感した。

休憩の時間になった。友達とおむすびを買って休憩スペースで食べることにした。友達と食べていると、人がたくさん入ってきた。おばさんが私の前の席に座った。疲れたねえと声をかけられた。その言葉を聞いてなんだか心が温かくなった。自分と同じ気持ちの人に出会おうとうれしくなるのだなと思った。休憩の時間にはその日、初めて会った人とも今まで話したことがあるのかのように、話をしていった。どの人も気軽に話しかけてくれて、自分も答えやすかった。こんなふうにもみんなが笑顔になれてとても素敵だなと思った。

午後からは午前中よりもいそがしかった。小さい子が綿菓子を買いにきてくれた。私はとても疲れてしまった。しかし、綿菓子を作る様子を興味津々に見つめる小さい子の姿や綿菓子を渡してあげたときの笑顔が疲れを吹き飛ばしてしまった。誰かの笑顔を見ることがこんなにうれしいことだとは知らなかった。私は初め、明るくはなかったかも知れないが小さい子の笑顔を見てだんだんと明るくなっていったに違いない。ボランティアも終わりとなるころ、夏休みに協力する人とはとても仲良くなれていた。

ボランティアも終わりとなるころ、夏祭りに協力する人とはとても仲良くなれていた。

ボランティアが終わり、新たな夏休みが始まった。私はボランティア前の夏休みとボランティア後の夏休みは全く変わったものになる、と思った。それはボランティアを通じてたくさんのことを学んだからだった。協力の大切さ、笑顔の

大切さ。とても生きていく上で大切なことだった。

私は仕事をするのことに對していくつもの不安があった。他の人と仲良くなれるのか、責任をもって仕事に取り組めるか。どんな厳しいことが待っているのだろう。それが不安で仕方なかった。しかし、ボランティアを通じて仕事への考え方が変わった。仲良くなれるのか不安だったが自然と仲良くなれるのだと分かった。分からないことがあったらどうしよう、とも思っていたが迷わず人に聞ければ良い、ということが分かった。間違えたことをして失敗するよりも人に聞いて正しく行った方が良いと思う。不安だったことがたくさんあったが、ボランティアでたくさん学び、不安ではなくなることが多くある。

今、強くなりたいと願っている職業はない。しかし、今まで持っていた仕事への不安はあまりなくなってしまった。今、学校で学んでいるどんなことでも仕事をするのにつながらずには、と思った。それどころか学校へ行くことがつながらずにいるのではないかと思った。ボランティアが終わってからはどんな仕事があるのか調べてみた。一つの行事、一つの物にはたくさんの方が関わっていることを忘れずに生活していきたい。将来するであろう仕事を恐れず楽しめればいいなと思う。この文章を書いている今も、一生懸命働いている人でありがとう、お疲れさまと伝えたい。

## つくることの喜び

町田市立真光寺中学校 三年

福島 史 弥

「自分でつくった野菜は美味しい」という言葉をよく聞きます。

僕はお父さんとお母さんの影響で、5歳のころから家庭菜園で野菜を作っています。春から夏にかけてはジャガイモやトマト、ナス、ピーマン、枝豆など、秋から冬にかけては、ダイコンやニンジン、ホウレンソウやグリーンピース、イチゴなど色々な野菜や果物を育ててきました。

一言で「家庭菜園」といいますが、家庭菜園を作るときには、元々の土を耕してその中にある大きな石や粘土など根が伸びるのを邪魔するものを取り除いた後、作物が育ちやすいように肥料を入れたり畝を作ったりするなどの作業が必要になります。またそこで作物を育てるときには、種まき、水やり、脇芽かきなどを行う必要があります。

家庭菜園で野菜を育てるには、色々な作業や努力が必要になります。ただそれによって全てが全て美味しい野菜ができるわけではありません。天気によって途中で枯れてしまったり、害虫に葉や実を食べられてしまったりします。水や肥料をあげるのを忘れてしまうと実ができなかったり小さく

なってしまったりするなど、小さな家庭菜園とはいえず、自然相手に物を作るのは大変です。

そんな色々な苦労をして作った野菜ですから、実が小さかったり形が悪かったりするものの、スーパーマーケットなどの店で売っている野菜よりも新鮮で美味しいことが多いです。しかし、家庭菜園でつくった野菜が全て店で売っている野菜よりも美味しいかというところでありません。例えばミニトマト。家庭菜園で作るミニトマトは皮が固く酸味が強いものが多いですが、店で売っているものはどれも皮が柔らかく「これは果物か?」と思ってしまうくらい甘いものもあります。イチゴも家庭菜園で採れたものは小さくて甘みが強くないものが多いのですが、店に並ぶイチゴはどれも大きくツヤがあり、しかもとても甘いです。

「自分で作った野菜は美味しい」のであれば、家庭菜園の野菜が美味しいはずなのに、どうして店で売っているもののほうが美味しく感じるものがあるのだろうか、なぜ店の野菜のほうが美味しいと感じるものがあるのだろうか。「自分で作った野菜は美味しい」って一体何なのだろうか?

そもそも僕は、「自分でつくった野菜は美味しい」という言葉は、「自分が汗水たらし、努力して育てた結果、収穫できた野菜は全て美味しい」ということではないかと



思っていました。少々の味や見た目の悪さなどがあったとしても、努力した分だけ店で売っている野菜よりも「美味しい」と感じるのではないかな、と思っていました。しかし、よく考えてみると、お店で売っている野菜も、工場で作っているものも少しありますが、ほとんどは、農家さんたちが自分たち以上に「汗水たらし、努力し、育て、収穫した野菜」です。しかも農家さんたちは野菜のプロですから、その野菜にあっただ育て方をし、「みんなに美味しいものを食べさせてあげたい」と色々な工夫や努力をして野菜を育てています。さらに、そこで収穫できた野菜の中でもえりすぐりものを商品として出荷しているのだから、「自分たちが作ったものよりも美味しい野菜があったとしてもしょうがない、ある意味当然なんだな。」と思いました。

もし、僕が家庭菜園をやっていなかったら、農家さんの努力や、農家さんの野菜について考えることも、自分で作った野菜のおいしさも、自分で何かを作る喜びも知ることができなかったの、「家庭菜園を今までやってきてよかったなあ」と感じました。そして、このような考えや気持ちを忘れないためにも、今後も積極的に家庭菜園を続けていきたいです。

## 人とつながる仕事

東京都立桜修館中等教育学校 三年

神崎 朱由

昨年の十月、私は職場体験に行った。三日間、図書館で表の仕事も裏の仕事も体験し、「働く」ということがどれだけ難しく、大切なものであるかを知った。その「働く」ことを通して、私は二つのことを学んだ。

私が職場体験をした場所は、都立中央図書館というところだ。この図書館は市区町村の図書館と比べ蔵書数が多く、館内ではか本を閲覧できないというのが特徴だ。そんな図書館での職場体験の三日目、私は資料管理課というところで二つの実習を行った。一つは、購入する本を選ぶというものだった。都立中央図書館に職場体験に行った四人の中で二人ずつに分かれてそれぞれのグループで違ったテーマを選び、用意された似た内容の三、四冊の本から購入する本を決めた。同



じテーマの本でも内容は全く違っており、短い時間でたった一冊の本に決めるといふのは難しい作業だった。私達は自分たちが利用者と考えたとき、写真などの量による手に取りやすさを重視していたが、図書館で毎日実際に本を選んでいく方々の選び方は違った。都立中央図書館では既にある程度の知識を持った人がその知識をさらに深めるため、ここにしかない本を求めて来ることが多い。また、利用者が手にとって見られる本よりも書庫に置いてある本の方が圧倒的に多いそう。そういった理由からこの図書館では手に取りやすい本よりも内容がより濃く、詳しく書かれている本を中心に選んでいるということを知った。普段私達が人に本をすすめるときは「手にとりやすい」「写真などが多くわかりやすい」ということを良さとして挙げることが多いが、今回は違った視点で見る必要があった。この経験を通して私は単純に物事を自分の基準で決めてしまいうのではなく、その背景などを考え、状況に合った臨機応変な判断が仕事をする上で大切だとわかった。図書館で本を選ぶ仕事は、その図書館にある本を決めるため、どのような図書館なのかを決めることにもつながる。それは図書館を支える全ての仕事に共通しており、どんな仕事でも目的を明確にしなければならないと思った。

二つめは、本の分類を決め、そのラベルを作る実習だ。ここでは実際に私達が本の内容から分類を決めた。本の分類番号は日本国内では共通のもので、三桁の整数と場合によっては少数も使って本の内容で分類されている。実際に私は本の分類をするため、どのグループがどのような内容なのか詳しく書かれた本を見せてもらったが、ただの分類の仕方を書

ただだけの本でもかなりの厚さがあり、驚いた。その後、本の分類番号や書名、本のサイズなどをパソコンに入力し、分類番号のラベルを印刷して本とラベルを別の部屋に持っていくところまでを行った。私は、ラベルができあがった後、担当の方に「本とラベルをあ部屋に持って行ってください」と言われ、何も考えずにその部屋まで行ったが、そこに入った瞬間、ここまでが自分の仕事だったのだということに気がついた。その部屋では、ラベルを本に貼る作業が行われていた。そこで自分の作ったものが加工され、利用者から近くなっていく様子を見ると、自分の小さな仕事と自分からは見えない誰かの仕事が組み合わさって一つのものとなるということを感じた。考えてみれば、この実習の前に行った本を選ぶという仕事もラベルを作り、貼るという仕事とつながっている。直接的ではないとしても人と人がつながっていき、皆で一つのものを作り上げているということに楽しさを感じた。自分一人で全て作るというのも楽しいが、人と協力することでこれが徐々に完成に近づいていくということ想像するとわくわくする。また、自分が作ったものが他の人の手によってさらに大きなものになると達成感を感ぜられると思う。

図書館に限らず、どんな仕事も一人で全て完成させるものではない。だからこそ、その一つのものを作る人々が完成形を理解し同じ目的で作っていく必要がある。そうやって全員が同じ目標で協力して作りあげることには楽しさがある。将来、どんな仕事に就いても、私は同じものを作り合わせる仲間と心を合わせて、協力することを楽しみたいと思う。



高等学校の部 最優秀賞

ホスピタリティ

岩倉高等学校 三年

長 廣 悠 真

「バリアフリー」最近よく耳にする言葉だ。そして、よく形として見受けられるようになった。例えば、段差を小さくしたノンステップバス、高さの低い自動販売機、そして、駅のホームなどに増えてきているエレベーターもバリアフリーへの取り組みの一つだといえるだろう。バリアフリーとは、体が不自由な方やお年寄りの方などにとって障壁となるものを取り除く施策を意味する。しかし、その普及がまだまだだというのが現状だ。

私は高校二年生の時、「ホスピタリティ」という授業を受けた。その授業では、体の不自由な方やお年寄りの方と、どのようにコミュニケーションを取るべきなのかを学んだ。最初の段階では、特性を理解し、どのようなことを求めているのかを知ることから始めた。その後、二人組になり高齢者疑似体験や車いす体験をした。高齢者疑似体験では、白内障の方の見え方に近づけるために専用のゴーグルを付けたり、聴力を低下させるためにヘッドホンを着けたり、また、動きを鈍くするために手足に重りを付けたりして学校内を一周した。普段歩き慣れている廊下や階段を一歩進むだけでも一苦労で、

何よりも足を踏み外さないかななどの恐怖が強かった。人間、五感（視覚・聴覚・味覚・嗅覚・触覚）の一つでも欠けてしまふと私たちにとってできていたことが難しくなるということを実感した。そして、すぐにそのような方を街中で見かけたら手助けしようと思っただけで、その後の授業でこんなことを学んだ。「見守るサポート」というもの。もちろん、手助けをすることは大切なことだが、必要以上にしてしまうと、お年寄りの方は人生の先輩であるため、子ども扱いを受けているように感じられ、プライドが傷つくかもしれない。そのため、直接的なサポートに加えて自分自身で何かを頑張っている最中には近くで見守るサポートをすることも大切なのだ。

そんな中、ある日の学校からの帰宅途中、ポンポンと肩を叩かれたので振り向くと、外国人観光客と思われる二人の男性から声をかけられた。そしてスマートフォン画面を私に見せてきて、ここに今から行きたいと指差しした。その目的地へ行くには途中駅での乗り換えが必要だった。普段、外国人観光客から尋ね



高等学校の部 最優秀賞 長廣 悠真さん

られることはしばしばあったので、いつものように不器用ながら簡単な英語を話して伝えてみた。しかし、表情を見ると伝わっていない様子だった。今度はもう少しはっきりと話してみた。しかしそれでも伝わらない。私の発音がおかしいのかなと最初は思い、その後も何度か頑張ってみたものの、何か様子が違う。実は、耳の不自由な方だったのだ。これまで冷静に対応できていたが、二人の状況を理解した途端、少し私自身の気持ちの中に焦りが出始めた。どのようにして伝えればいいのかと。それでも、何とかしてこの二人の力になりたい。そう決心して一度気持ちを整理した。そうすると、ふとホスピタリティで学んだ、耳の不自由な方とのコミュニケーションの仕方を思い出した。「手話」はできないので、「ジェスチャー」を使って乗り換えの駅名や目的地に着く時刻などを伝えた。また、場所の位置関係はジェスチャーでは伝わりにくいので、ポケットに入っていた手帳に書いて伝える「筆談」を交えた。そのように私自身できることを最大限に使って伝えてみると、先ほどまでとは違って明るい笑顔をみせてくれた。とても安心している様子がうかがえた。私もその様子を見て嬉しかった。そして、二人が電車に乗り、出発して行く姿を見届けた。

学校で学んだことを使える日がくるとは思わなかったのですが、この日を機にホスピタリティはもちろん、その他の科目への取り組み姿勢が変わった。今まではただ、ノートに板書を写し、試験前にはそれを見返して勉強をするのが普通であったが、今では、授業中に、「何でそのようになるのだろう。」「もしくだったらどうなるのかな。」などと考えながら取り組み

ようになった。

現在、高齢者（六十五歳以上）の方の総人口に占める割合が約三十パーセントになっている日本。この先も高齢化は進むだろう。また、私が体験したように身体が不自由な方への対応をしたことが誰にでも日常の中で起こり得るかもしれない。そのようなことに対応していくためには今以上にバリアフリーへの取り組みの強化が必要になってくるのではないだろうか。しかし、そのような「モノ」だけに頼っていても完璧な対応をすることはできないだろう。確かに最近急速な人工知能の普及により「ヒト」から「モノ」へ役目に変化する世の中になった。しかし、もしあなたが助けを求めているとすれば、人間と機械のどちらの対応が真のコミュニケーションと言えるだろうか。本当にこれから必要なのは私たち人間にしかできない温かい対応なのかもしれない。温かい対応とは、一人ひとりの個性に寄り添った、いわゆる前文で記した「見守るサポート」だと考える。

ホスピタリティとは何か、正確な答えを出すことは難しいが、僅かながら授業で学んだ私が考えるホスピタリティとは、「人間らしい生活を送るために人間同士が支え合うこと」である。私はその一部をあの日帰宅途中で体験したが、それだけでなくホスピタリティの素晴らしさを実感した。これからは更に、幅広く、的確に物事を相手に伝えられるよう手話などの難しいことにも挑戦していきたい。

## 高等学校の部 優秀賞

### 人に夢を与える

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

#### 瀧瀬 妃 菜

「農業高校なんて……」入学した当初はこんなことを思いながら学校生活を送っていた。これといった夢はなく、ただ毎日机に向かって授業を受ける、そんな日々を繰り返していた。農業高校では一年の時から農業の専門教科があり、その中の一つに「農業と環境」という授業があった。この授業は畑作業などの実習を通して農業を学ぶものだ。私は最初、畑作業が面倒で仕方がなかった。土で手や服が汚れる、夏は暑い上に虫は多くいる。そんなことで私は少しも農業の魅力を感じなかった。「野菜を育てるのなんて面倒だ」とまで思ってしまった。しかし、今ではなぜこんなことを思ってしまったのか、なぜ農業の素晴らしさに早く気づけなかったのかと後悔をしている。

一年生の秋、私は友人に誘われ、食品科プロジェクト研究活動のメンバーになったが、活動内容など何も知らないまま、殆ど活動には参加しないという状況が続いていた。ある日、活動に参加してみることにした。その日は一日中農作業だった。面倒だと思いつつ作業をしていた時、顧問の先生がこんなことを言ってくれた。「人や動物と同じで、野菜に

も生命がある。」当たり前前の言葉だと思ふ人もいるかもしれないが、農業に興味がなかった私は、この言葉で大きく気持ちを動かされたのである。「農業と環境」の授業のときには野菜を大切に扱っていなかった。野菜には生命があるものだと思つて作業をしていなかった。ここで初めて、農業の素晴らしさに気付くことができたのだ。私にとってはここから本物の農業高校生の始まりだった。

二年生に進級し、プロジェクト研究活動にも積極的に参加するようになっていた頃、私たちの活動に新しく一年生が参加し始めた。とてもやる気のある子たちで、私が一年生だった時とは比べものにならない。自分の夢をしっかりと持ち、農業に対して真剣に向き合っていた。そのことを一番感じたのは農作業の活動の時だった。きちんと取り組んできた一年生の作業を見ると、自分との差を感じた。この時私の中に、「後悔」の気持ちが生まれてきた。

私は学校農業クラブの一環として、プロジェクト研究発表の関東大会に出場することになった。発表内容は、私たちが開発した『瑞穂七色唐辛子』を通じた瑞穂町の産業振興への寄与をテーマにしたものだ。勿論、私にとっては今回が初めての大会である。その場で私は、発表者という大役を任せられていた。発表する前には、原稿の暗記や制限時間内に発表するという大きな壁が何度も立ちはだかった。繰り返し練習していくうちに、少しずつ自分が成長していると感ずることができた。そして、こんな素晴らしい経験ができるのは、このプロジェクト研究活動しかない、と感じていた。

この研究活動に参加しなければ学ぶことができなかったこ

とはもう一つある。それは人との繋がりがだ。このプロジェクト研究活動は、今まで瑞穂町の多くの方々や先生方に支援や助言をいただいている。私たちの活動に対して、真剣に考えてくれている人たちがいる。本当に人の支えや繋がりがとても大切だと気付かされた。

このプロジェクト研究活動を通して、「農業の素晴らしさ」と「人との繋がりの大切さ」を学んだ。そして、農業に対してだけでなく、様々な世界観が大きく変わったことが実感できた。夢も目標もなかった私をプロジェクト研究活動に受け入れ、様々な場面でいつも支援してくれた顧問の先生のおかげだ。先生という仕事は「人に夢を与える」素晴らしい職業だと思った。私も、以前の私のように、夢がなくつまらない日々を送っている農業高校生たちに夢を与えてあげたい。農業の素晴らしさに早く気付かせてあげたい。自分がしたのと同じ後悔をこれからの後輩達に繰り返させないようにしたい。先生が私に夢を与えてくれたように、私も人に夢を与える教師になる。私はこう決断をした。

高校入学時の私は、卒業したら就職するものと漠然と考えていた。しかし、今の私は、この夢を実現するために四年制大学の農学部に進学したいと考えている。

農業科（特に食品系学科）の教師になるためには、野菜の栽培管理方法、各食品の加工原理及び製造技術、食品成分ごとの実験原理及び実験技術、そして製造機械や農業機械の操作など、農業についての深い知識や技術が必要である。加えて、プロジェクト研究活動を指導するには「歴史・文化」や「統計・分析」「先端科学」など幅広い知識も求められる。こ

れらについて主体的に学び、未来の農業高校生に夢のある農業を教えられるような教師になりたい。

普通科高校にはできない魅力が農業高校には詰まっている。この魅力を子供たちに伝えることは、農業科の教師にとって大切なことである。私が今、農業の魅力に気付き、教師になるという夢を持てたのは、顧問の先生がいつも温かく私のことを見守り、指導してくれたからだ。私は先生を信頼し、必死についていくことで成長できた。私が教師になったとき、今の私が先生に感じている信頼感を感じてもらえるような教師になる。こう強く思いながら、これからの学校生活や研究活動を大切に続けていきたい。



## 高等学校の部 佳作

### スマートアイランドプロジェクト

東京都立大島高等学校 三年

梅田 桃馬

「コケー！」ニワトリの頸動脈に包丁を入れると、赤い血が流れ落ち、叫び声を出しました。それは、一年の夏、初めてのと畜でした。放血器の中で暴れる姿からは「羽を開いて逃げよう」という意思が伝わります。命が消えていく様は、とても悲しいものです。しかし、その命は私たちが生きていく上で必要不可欠なものであり、価値のあるものだ、「農業と環境」の授業を通して学びました。

私の住む伊豆大島は人口約七千七百人。少子高齢化による人口減少に陥っていますが、それと同時に人口以上に増える特定外来生物、キョンとタイワンリスが問題となっています。

先日、町役場と東京都が共同で開催したキョンセミナーに参加しました。小型のシカ「キョン」は台風被害によって都立大島公園から逃げ出したものが野生化。二千十七年には、約一万七千頭前後が生息、アシタバなどの農作物被害額は年間約三百八十万円にもなります。セミナーの最後には今後の駆除計画についての説明と質疑応答がありました。会場の空気が変わったのは、その時でした。「今まで

計画通りに進んでいない」と行政への不満と怒りが爆発しているのです。確かに、責任は東京都にあり、しっかり対策をしてもらいたいとの被害者感情もわかります。しかし島の人口以上に増えてしまった現在、私たち島民が立ち上がるしか道はないと思いました。

そこで私が考えたのは、キョンを食肉として産業化することです。都内のフランス料理店では猟師から直接仕入れ、ローストやパテにして提供しています。店主は「初めて食べる人がほとんどだが『おいしい』と好評ですよ」と話します。このキョンを海に囲まれた大島の特性を生かし、海浜バーベキューの材料として提供するのです。しかし、町や都の担当者は「駆除に乗りだしたばかりで、産業化を検討する段階にはない」と取り合ってくれません。

それならば、私たちが効果的な捕獲方法を研究し、駆除から産業化へ切り替えられるようにしようと、行動することになりました。今回対象にしたのは、小さく高校生でも扱いやすいタイワンリスです。このリスはツバキの実やメジロの卵を食べます。メジロが受粉した椿の実から絞る椿油は大島の主要産業です。このままでは、椿油の生産量は減少し続けてしまいます。

早速、校内にハコ罠を設置しました。ところが学校の敷地は広く見周りに手間が掛ってしまいます。ある日、見回りの回数が減ったためリスが罠の中で死んでいました。その顔は苦しそうで、あの、と畜した時のニワトリが思い出され、悲しい気持ちになりました。同じ命なのに、このように扱いを受けていいのだろうか、人間の都合で異郷の地

で解き放たれ殺される。せめて、最期は価値あるものにしてあげたい。そう思ったのです。

効率よく捕獲状況を確認したいと考えた時、「農業情報処理」の授業で先生が口にした「これからの農業はIoTが主役だ」という言葉を思い出しました。そこで、以前発表会で知り合った業者さんに連絡を取り、ハコ畝用のセンサーをお借りしました。これを設置することで捕獲の通知が位置情報とともに携帯電話にきます。これで従来のような見回りが必要なくなるのです。設置した日から私のクラスでは「リス捕まっちゃって!」「やったね!」という会話が增え、積極的に対策をしようという気持ちが高くなりました。

さらに効率的な駆除のため畝に入れるエサの検討試験を行いました。農業被害もあり、長期保存が可能なサツマイモを選定。商品にならない小さなイモなら資源を有効活用することができそうです。食いつきはよく、さらにツバキ油の絞り粕を塗布することで嗜好性が高まることを確認できました。その結果、約一カ月で五十匹のリスを捕獲。性別を調べると六十%がオスでした。この結果からオスは広い縄張りを持ち、メスは小さな範囲でしか行動しないと考えられます。今後は、畝の位置を変え、メスを効率よく捕獲する方法の検討を行います。

これと同時に「総合実習」で、小学生にリスの生態や捕獲方法を伝える機会を作りました。すると、興味を持ち多くの質問をしてくれました。そして後日、リスを捕まえたことと連絡があったときには、「全島民で取り組める。このプロジェクトには未来がある」と思いました。

このモデルケースを確立し、キョンに応用したとしても外来生物の駆除だけで生計を立てるのは難しいのが現状です。そのため私は自動車整備士として生活基盤を作りつつ、外来生物の駆除に携わりたいと思っています。それができるのが、IoTの強みです。そして、島民にIoTのオリワナシステムを知ってもらい、全島で取り組むのです。私たちが作ったモデルケースをキョンに置き換え、島民で取り組めば予算や労働力の余剰が見込めます。それをキョンのジビエ産業に活かすのが一つの夢です。人口減少を食い止めるためにもこのジビエ産業を観光業の一つとして発展させ、来島者数の安定化につなげます。

自然とIoTが共存する島、スマートアイランドを目指して!



## 島の産業と生態系を守るために

東京都立大島高等学校 三年

川崎 大洋

「あ、リスがいる」伊豆大島を訪れる観光客の方は、その愛らしい姿を見つけるととても喜んでくれます。それもそのはず、このリスは、もとは大島公園動物園で観賞用に移入・飼育されていたタイワンリス。それが逃げ出して野生化したもの。しかし現在では特定外来生物に指定され、伊豆大島だけでなく全国各地で問題を引き起こしている害獣です。

現在、伊豆大島におけるタイワンリスの生息数は約3万匹と言われていますが、実態は不明です。しかしその姿を目にする頻度は、私が子供のころよりも格段に増えました。その被害は多岐に及び、たとえば五月から六月になると樅の实の中にあるゼリー状のものを好んで舐めるために、伊豆大島の特産品、椿油の原料となる椿の实を大量に落とし、落としてしまいます。また、樹皮を削って樹液を舐めるために、かじられたヤブツバキなどの樹木が衰弱しています。さらには在来の昆虫類やメジロなどの小鳥の卵や雛を食べたり、電線に危害を与え停電や火災などの被害を起こしています。本来タイワンリスは、台湾原産の動物なので伊豆大島には天敵もおらずその数は増える一方です。これを受けて町は対策として罾の貸し出しや報奨金制度を行っていますが、

捕獲はとも追いついていません。

自分は高校では農林科でツバキについて学んできました。そしてツバキを生かした地域振興策を提唱し、2年生の時に「ビジネスプラングランプリin TOKYO」で、仲間とともに最優秀賞である東京都知事賞をいただき、ツバキを守り生かしていくことの重要性を確信しました。そして3年生になり、伊豆大島の地域資源として持続的にツバキを活かしていくためには、タイワンリスの問題をなんとかしないといけないと思うようになり、課題研究のテーマとしてタイワンリスの防除を設定しました。

結論から言うと4月から7月までの1学期の間で、126匹を捕まえることができました。しかし、最初からうまくいったわけではありません。最初はサツマイモだけを罾に入れて餌にしていたがなかなか捕獲できませんでした。「あまり知られていないけど、椿油をぬるとすごく食べるよ」これは地域にある椿花ガーデンという椿園の園長さんが教えてくれたことです。椿花ガーデンは、2016年に本校の椿園と同時に国際優秀つばき園に認定された有名な椿園で、普段から栽培や椿ガイドについて色々助言していただいています。農林科の卒業生でもあり、私たちの大先輩である園長さんは、リスを捕まえる方法についてもそうアドバイスをしてくれました。さっそく実践してみると、なんとということでしょう、そこにツバキ油を塗るだけで、リスが毎日のように捕まえられるようになったのです。そこからはコストを抑えるために、サツマイモをなるべく小さく切る方法や、リスが通る道をつくって誘引する方法、バネ

の強化や罾の着脱方法など、捕獲にあたってより効果的な方法を追求するステージに進むことができました。

捕獲の効率をあげるのに、もっとも有効だったのは、無線発信システムを使ってタイワンリスが罾にかかった時にその情報を受信できるシステムの導入です。里山の保全活動で連携しているフォレストシーさんの「里山通信」という無線発信システムを使わせていただいています。もともとはシカやイノシシという国内の害獣対策として用いられているのですが、タイワンリスなどの小型獣も各地で問題になっているので、実用化に向けたモデルとして提供していただきました。罾をつかった害獣防除で一番大変なのは見回りだとも言われています。何十個もの罾を毎日見て回るのとはとてもない労力が必要です。里山通信を導入するまでは見回りが本当に大変でした。これによって、発報した罾だけを見て回ればよくなったので、より時間を有効的に使えるようになりました。

成果をあげはじめると、周囲から声がかかるようになりました。校内だけでなく、椿油づくりで連携している業者さんの里山や、自宅近くの農家さんの土地などでの防除も引き受けて地域の方と一緒に取り組みました。小学校からも総合的な学習の講師を頼まれ、説明に行きました。タイワンリスの生態や問題を説明すると、「知らなかった」「みんなで取り組まない」という反応になり、よりやりがいを感じるようになりました。

問題点としては、伊豆大島の生態系を崩しているということや、椿油産業に関わらない人からした

ら無関係の話になってしまっています。たとえば、今年は毛虫やチャドクガが大量に発生しました。私はタイワンリスの大繁殖がその一因と考えました。なぜなら、小鳥はおもに木の実や虫などを食べます。もちろん毛虫やチャドクガも例外ではありません。タイワンリスによる卵や雛の被害により、小鳥の数が減ればそれによって毛虫やチャドクガの数が多くなると思ったからです。また、オスのほうがメスより捕獲されやすいのはなぜか考えたり、捕獲した個体の重さの季節による差、雌雄の差などから色々考えるのも盛り上がります。そこから多くの人が地域について考えるきっかけになればと思っています。ただ、特定外来種とはいえタイワンリスもひとつの命、ゲーム感覚にならないよう校内の供養塔で手を合わせることも続けています。

タイワンリスは現在捕獲後、焼却処分になっていますが、毛皮やジビエ料理など新たな伊豆大島の特産品にすることを考えています。そのために、今は狩猟免許を取得するため勉強しています。将来は故郷伊豆大島で暮らし、大島の椿を守りながら、産業、生態系、そして島民の生活も守れる、自然と共生する誇りある仕事をしたいと考えています。

## ジャポネイラレモンプロジェクト

東京都立大島高等学校 三年

杉 山 柁 斗

「デカッ!?」それが授業でレモン農家の金森さんを訪ねたときの私たちの最初の印象でした。もちろん金森さんのことではなく、栽培されているレモンの大きさです。金森さんがおっしゃるには、伊豆大島の特産品である椿油、その搾油後の残渣である油粕を肥料にして栽培したところ、「なぜか分かんないけど大きいレモンができた」とのことでした。「ではこの謎を大島高校で研究するぞ。」これが、このプロジェクトの始まりです。

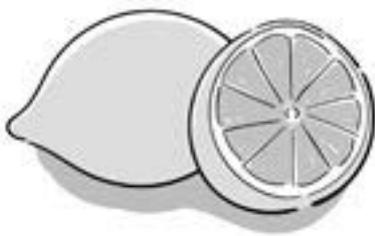
「ジャポネイラレモンプロジェクト」とは椿の島、伊豆大島でレモンを栽培し、地域を活性化しようという取り組みです。私の住む伊豆大島は人口と観光客の減少が大きな課題です。本校には教育機関として世界初の国際優秀椿園に認定された椿園があり、椿油メーカーと連携し椿油を作っています。その時に出る油粕を有効に活用すること、椿油に並ぶ新たな特産品を作り、島を元気にしたい、それがこの活動のテーマになっています。

「ジャポネイラ」とはポルトガルにおけるヤブツバキの呼称。ポルトガルには約400年前に日本から伝わったヤブツバキがあり、日本から来たもの、という意味でそう呼ば

れているそうです。このプロジェクトでは、「リスボン」というポルトガル原産の品種のレモンを栽培します。数百年前、きっとポルトガルで「ジャポネイラ」すなわちヤブツバキと、現地にあった「リスボン」は出会っていたことでしょう。そのヤブツバキとレモンが、時と場所を越え、椿の島伊豆大島で再会する、そんなブランドストーリーで、レモンを新たな特産品にすべく、「ジャポネイラレモンプロジェクト」と名付けました。

「リスボン」は世界中で栽培されているもので、決して珍しい品種ではありません。栽培自体も野菜や草花のように難しさや日々の管理が必要でないため、粗放的な栽培で問題ありません。事実、金森さんは東京で仕事をしながら、週末農業で管理してきたそうです。ただし風に弱いので、ネットやハウスを使うなどして防風対策をしなければ質の良いレモンは栽培できません。潰瘍病やハモグリガなどの病害虫も最初は気をつけてコツを掴めばレモン栽培の害としての要素は格段に下がるということも金森さんに教わりました。

レモン栽培は多くの肥料を必要とします。肥料になる油粕は大島に大量にあるので金森さんのようにこれを有効に使えば、地域の伝統的な特産品である椿と、新たに導入するレモンを融和させ、新たな付加価値のある特産品を作ることになります。そして、栽培に留まらず、調理や加工、観光にも結びつけ、6次産業化



すること地域産業が復活すれば、雇用が生まれ人口減少の歯止めになります。

さっそく椿油粕の肥効について研究しました。レモンを鉢植えて、それぞれ肥料を調節して成長の変化を観察し、その結果がどうなるか調べました。その結果、対象区に比べ、油粕を施用した鉢は、どれも実付きが良くなりました。それはきっと、油粕はヤブツバキの種子からできており、成分としてリン酸やカリウムが多いからではないかと考えています。一方で油粕のみを施用した鉢は、葉や芽の伸長や数は少なく、窒素分は不足しているように思いました。現段階では、栄養成長を促すには通常の肥料を施用し、生殖成長を促す段階で油粕を施用していくことが効果的ではないかと考えています。今後、成分分析や栽培試験を繰り返し、その仮説を検証していきます。

では、レモンを栽培したところで、実際に需要はあるのでしょうか。国内のレモン産地は瀬戸内が有名です。しかし自給率はわずかに13%。国内に流通しているレモンの大半は輸入レモンですが、残留農薬が心配され現在国産レモンの需要は高まっています。金森さんが栽培されているレモンは島内外で大変人気で、去年はインターネットでも販売し即売したそうです。伊豆大島のレモン、その需要は島内外にあると考えられます。また、昔から日本では椿のある所に柑橘は育つとされ、江戸時代以降、ツバキは柑橘を植える目印とされました。ミカンの産地とツバキの産地は重複しているので、柑橘の仲間であるレモンの栽培環境も整っています。栽培する土地はあるが、人口減少と高齢

化で、伊豆大島には耕作放棄地が約120ヘクタールあります。町も耕作放棄地の活用を推進しており、労働力さえあれば、栽培規模を広げることができます。あとは経営的に成り立つかです。

1ヘクタールの農地で、約1千本のレモンが栽培できます。仮に伊豆大島の耕作放棄地の1割の12ヘクタールをレモン畑にしたら1万2千本のレモンが栽培できます。1本あたり200〜300個の収穫を見込み、1個当たりの単価を150円とすれば、1本当たり少なくとも3万円の売り上げを見込めます。1万2千本あれば4億円近い売り上げになるでしょう。現在の伊豆大島の農業生産高は約5億円ですので、ほぼ倍増です。ジャポネイラレモンの付加価値が高まればより高値で取引されるようになるでしょうし、加工や調理などで提供されるようになれば、6次産業化が進みさらなる利益をあげることができるでしょう。若者が参入するに当たりとても夢がある話だと思っています。

このプロジェクトは、すでに島内外多くの方に注目していただき、各方面と連携した取り組みが始まっています。私は仲間とこのプランをビジネスプラングランプリin東京で発表し、東京都知事賞を頂きました。伊豆大島の発展を手助けできる基盤を私たちが作り、故郷をより住みやすく、観光に行きたい、住んでみたいと思わせられるような場所にしていきたい。そう考えながら私はこれからも研究を続けていこうと思います。

## これからの農業支援

東京都立農芸高等学校 二年

大川 博子

私たちの幸せを創るものは何ですか、私は健康があつてこそ幸せは成り立つことだと思います。健康になるためにまず必要なことは「食べる」「暮らす」ということだと思います。毎口口にしている米やパン、魚や肉は顔も知らない誰かが生産し、加工されて私達のもとに届いています。豊かで「食べる」「暮らす」ということに困らない国もある一方で収益がなく、明日の暮らしを確保することさえ困難な地域もあります。食糧を確保することが難しい地域では、農業の知識や技術が少なく、農産物の生産性が低いことが原因の一つとなつている場合も多くあると思います。収入が少ないということでも失われる命さえあります。私は農業を学んでいます。この学んでいる農業で将来、幸せを支援する活動ができないかと考えています。

私がこのように考えたきっかけはあるテレビ番組で紹介された一人の日本人男性の活動を見たことです。この男性はアフリカの干ばつが激しい地域で育てられる作物は何だろうかと考え、落花生を育てました。その土地に住んでいる人々は食糧を確保し、生産した落花生を売って利益を生むことができ、生活が以前よりも豊かになりました。私は

他にも農産物を栽培する支援事例がないか探してみました。すると、ガーナの小さな村でパイナップルを栽培し村の生活を豊かにした事例がありました、村には干ばつの時期でも枯れていない木があり、その木がパイナップル科であることに着目した日本人の発想による支援です。パイナップルを栽培することにより干ばつに左右されずに収益が安定しました。またタイ北部の村にイチゴ栽培を導入し村を豊かにした事例がありました。この村では収益性のある産業がなく、古くからケシを密栽培しアヘンを生産して闇ルートへ売買することで生計を建てている村でした。長く他に方法がなく、国も警察もお手上げ状態だった状況の中、この村の土壌と気候に着目した日本人がイチゴ栽培を定着させ、違法なアヘン栽培をやめさせ、さらに収益を安定させることに成功しています。支援とは募金や寄付だけだと思つていましたが知識で支援することもできるのでこのことがわかり、いつか私も今学んでいる農業を深く学び、農産物で人を救うお手伝いがしたいと思うようになりました。私の取り組みたい支援は地域住民に愛され、地域の風土と結びついた継続可能な支援です。

世界の飢餓人口はおよそ8億1500万人で、九人に一人が空腹や栄養不良に苦しんでいます。WFP国連世界食糧計画によると飢餓人口は1990年から1992年の時期に比べると、今現在は2億1600万人飢餓人口が減つたそうです。当時から食糧危機に対する絶え間ない努力が行われ減らすことができているですが、それでもすべての人達に食糧を行き渡らせることができず、根本的な解決に至つ

ていない現状です。ここで大切なのは先ほど述べた知識で支援することではないでしょうか。世界の飢餓の理由は戦争や貧困の差などがありますが、農産物の生産性の低さも理由の一つです。

農林水産研究所の明石光一郎先生の「農業生産性の国際比較分析」という論文によると「途上国は自国の農業がおかれている自然・経済的特徴を理解し、その国に適した農業技術の開発・普及を図らなければならない」とあります。この論文を読んで、農業技術の開発や普及にこそ支援をするべきだと思ふと同時に、各国は自国の農業がおかれている自然や経済的特徴を理解しているのだろうか、作物栽培の知識が足りていないのではないかと思いました。そう思う理由は、結果的に飢餓が無くならないという事と、干ばつが起きて収穫量が減少してもなお、同じ作物を育てているということからです。

次に問題となるのは、いったい何を栽培すれば生産性を高めることができるのかということです。授業では、植物を栽培する土壌の酸性度や水分について学びました。日本の農業は酸性の土壌を調整して植物の栽培により適した環境を作ったり、水分が多く必要な作物を育てたい時は雨を利用したりと豊富な水資源を活用しています。しかし気候の異なる地域では、日本と同様にはできません。その土地の環境に合った作物を育てることが重要になります。

例えば、東京農業大学の志和地弘信先生は、イモ類のヤムイモは高温・乾燥などの気候に強く、干ばつのリスクに対抗できると述べられています。イモの部分のみならず葉の部分

も栄養価が高いそうです。このような優良なイモ類ですが、イモ類のこの50年間の生産性は殆ど変わっていないそうです。このイモの例のように、有効に利用されていない農産物がたくさんあって、その農産物を改良することによって生産性を向上させられる作物があるのではないのでしょうか。

私は農産物の栽培導入による支援に取り組むために、園芸科学科で農業の基礎を身につけ、卒業後は大学に進学し、支援に活用できる農産物の開発の研究や、農産物を育てることが出来る知識と技能を、現地の人に具体的に伝えるための言語も習得したいと考えています。今からはこれらを現実のものとするために園芸科学科の一日一日を大切に過ごしていきます。

## 漬物の魅力と消費量の拡大について

東京都立農産高等学校 二年

但田 愛菜

皆さんは「漬物」についてどれくらいご存知でしょうか。漬物とは様々な食材を塩、酢、酒粕などの漬け込み材料とともに熟成させ風味をよくした食品です。

では、漬物にはいったいどんな種類があるのでしょうか。漬物でよく行われる分類方法は漬けるときに使用する副材料です。副材料には塩、ぬか、酒粕、みりん粕、醤油、麴、味

噌など様々なものがあり、これらにに応じて種類が決まります。他にも味の変化や期間でも分類することができます。

では、一体いつ頃から存在していたのでしょうか。過去の文献によると、今から2000年も前の大和時代からすでに塩漬けによる食品の保存が行われていたようです。奈良時代は塩でナスやウリ、モモなどの野菜や果物を漬けて寺院の僧侶の食用としており、平安時代になると重要な副食として扱われ、塩のほかに酒粕、もろみ、味噌等にも漬けていたそうです。鎌倉から室町時代では茶の湯や聞香の発達に伴い、漬物が盛んに賞味されるようになりました。江戸時代に入ると野菜の種類も多くなり、全国から多くの商人が江戸に集まるようになり、漬け方も当座漬け、一夜漬けなど様々な種類が生まれました。また家庭の漬物は、糖漬けの出現で事情が一変しました。漬け床を連続して使えるということによって広く一般家庭まで広まったのです。

明治時代になると東京など都市近郊の農家でたくあん漬けや奈良漬けが重要な副業となり、大正、昭和にかけて漬物生産業へと発展していきました。そして現在加工技術の進歩によりスーパ－等で手軽に購入できるようになった漬物は、まさに日本の伝統ともいえるのではないのでしょうか。

そんな漬物ですが、近年漬物の需要動向は購入数量、購入金額とともに減少し特に最近著しく落ち込んでいます。これには様々な原因が考えられますが、一番の原因は若者の漬物離れ、正確に言えば本来漬物と一緒に食べるはずの白米を若者が食べなくなっているからだと思えます。炭水化物を摂取することで太ってしまうという考えやパンの方がおいしい

という考え方が根付いていることで、必然的に漬物を食べる習慣が減っているのです。では、この漬物離れはいつたいどうしたらいいのでしょうか。現代の若者は漬物を自ら進んで食べようとしません。食の多様化によりジャンクフードや飲食店が増え、そうした環境で育った若者の食習慣の中には漬物が存在しないからです。こうした悪循環を脱する為には、若者に漬物の良さを知ってもらう必要があります。

実は漬物は生野菜よりも優れた健康効果を持っています。特に浅漬けより乳酸発酵したものがいいとされ、乳酸菌が作り出したビタミンB<sub>1</sub>類を摂取することが可能です。カサが減っている為食物繊維も豊富に摂れるし、乳酸菌はリラクセス効果、ストレス軽減、免疫力増進効果のあるアミノ酸GABAも生産しています。漬物は植物性乳酸菌が取れるので日本人の腸に合うといわれており、ヨーグルトやチーズ等の苦手な人に特に推奨できる発酵食品です。こんな利点があるということを知れば、今まで漬物を食べる機会がなかった若者も興味を持つのではないのでしょうか。しかし、問題はそれだけではありません。漬物の塩分に対する認識の誤解です。生活習慣病が大きく取り上げられ医師や栄養士からは塩分の摂りすぎへの注意がなされます。その例に挙げられるのが漬物です。しかし、漬物業界は早い時期から漬物の低塩化に取り組み、現在の漬物は梅干し、梅漬けの約10%という例を除けばほとんどの漬物が2〜



3%で、これは一日の塩分推奨摂取量のおおよそ半分しかありません。しかし見たためや味の印象から塩分が高いのではないかと思ひ、特に血圧を気にする方が購入しなくなっています。このイメージを払拭するために、今ままで以上に商品のパッケージに塩分量を大きく表示することを提案します。

漬物は味や香りが独特で、それが好きだという人もいますが、苦手な方が多いのが現状です。そこで、自宅で簡単にできる浅漬けの素等の即席調味料の味のレパートリーを増やすことで、手軽に親しみやすい味にできると考えます。現在浅漬けの素の種類は少なく、レギュラー、昆布だし、鰹だし、さわやか甘酢が代表として販売されています。これにカレー味やツナマヨ味等の子供でも親しみやすい味を追加することにより、年齢層の拡大が可能となり、さらに一年中の利用が見込めます。この際、浅漬けの素は液体状より粉末状のほうが比較的早く、味が染み込む傾向にあるため、販売する際は粉末状にしたほうが良いと考えています。更に親しみやすいという点と使い勝手がいいという点で「粉末状の漬物」を考えました。いぶりがっこのようにそれを更に乾燥させてふりかけにすることにより、一年中手軽に漬物を楽しむことができます。その他にも、余った漬物にトースト、チャーハンや炊き込みご飯の具、餃子等色々なアレンジを施すことで触感や味の変化が促され、消費量が大幅に拡大すると考えます。年々消費量、購入量ともに減り続けている漬物ですが、イメージさえ変わればその魅力に気がつくはずで、そのためにも私は、これから一人でも多くの人に漬物の魅力を知ってもらえるようにこのことを伝えていきたいと思ひます。

## 生命から学んだこと

東京都立瑞穂農芸高等学校 二年

清水杏樹

私には、将来動物関係の仕事に就きたいという夢がある。これは、幼い頃からずっと変わらず持ち続けている夢だ。瑞穂農芸高校への進学を決めたのも「生命に学ぶ学校」という特徴的な校風に惹かれ、自分の夢に近づけるためにここで学びは役に立つと感じたからだ。一年半瑞穂農芸高校に通って学んだことが、大きく分けて三つある。

一つめは観察・記録・知識の大切さだ。以前、異変に気づいたにも関わらず自分の行動力の甘さと知識不足により、動物が命を落としてしまったことがあった。救えたはずの命を救うことができず、とても後悔した。同じことを繰り返さないためにも、管理のときに異状がなかったから大丈夫ではなく、決められた時間以外にもこまめに様子を見に行くなど、動物とのコミュニケーションを大切にしたいと思ひた。また、観察した内容を記録することも大切だ。私が所属する動物愛好部では、毎日の日誌の他、怪我や病気など重要な連絡があった場合はノートで報告することになっている。こうして記録に残すことで、後で見返した時に、いつ、どこで、何が起きたのかを確認することができるので、個体管理に重要な役割を果たしているといえる。動物を飼

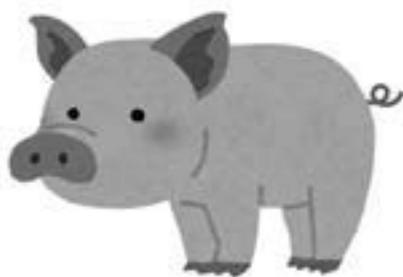
育する上で、「報告・連絡・相談」は大切だと思うので、今後も続けていきたい。動物の大小に関係なく、命を扱っていることに責任と自覚を持って、何かあったときに自分で気づいて行動できるような知識を備え、日々の観察を怠らないように心がけたい。

二つめは、よりよい環境作りだ。環境次第で動物はよくも悪くもなるということを学んだ。そしてその環境をコントロールするのは他でもなく人間だ。当然ではあるが、人間の飼育下で暮らしている動物たちは、人間が動かない限り死んでしまう。人間しか頼れるものがないのだから、人間がしっかりしなくてはならない。そこで第一に必要なとされるのは、個体に合った管理だと思う。なぜそれが必要なのか、人間を例に考えてみる。人間界では勉強が得意な人と苦手な人、運動が得意な人と苦手な人、などといった「得意」「不得意」や「向き」「不向き」があって、同じ人間でも様々なタイプに分けられている。それぞれが個性を持っていて、その個性を活かして適応する環境や状況を選ぶ。もし、不適応な環境に置かれたら、ストレスの原因になってしまうだろう。このように同じ種類の動物でも、個体によっても「好き」「嫌い」や「合う」「合わない」があるので、人間は動物の種類だけではなく、個体別に合う環境を判断し、それに従って管理をすることで、ストレスの溜まらない良い環境ができると思う。動物が過ごしやすい環境が提供できるように、心がけたい。

三つめは生命のありがたさだ。先日豚の分娩に立ち会い、初めて介助をした。予定日を一日過ぎた日の朝様子を見に

行ったが、産まれる気配はなかった。その日のうちには生まれなかつたかと思っていたが、夕方破水をして食欲が落ち、だんだん落ち着きがなくなっていた。破水を確認してから約一時間後に一頭目が頭から出てきて、自分の手で取り上げた時には、思わず「ありがとう」と言ってしまうほど感動と感謝で胸がいっぱいになった。夏の分娩ということもあり、暑さが心配だったが、その後も順調なペースで進み、全部で十一頭の子豚が誕生した。豚の膜は薄いから人間が介助をしなくても大丈夫と聞いていたけれど、しっかり拭き取らないと羊水が口に入ってしまうと呼吸ができなくなってしまうリスクがあることや、だんだんと陣痛が弱くなってきたり子豚が出てくなくなったら母豚のお腹をさすって刺激を与えたりする介助の必要性を実感した。一年生の時に行った鶏の解体も、鶏を育てるところから解体までを自分の手で行うことで、人間は周りの動物たちのおかげで成り立っていること、その生命のありがたみと重さを実感することができた。今回分娩に立ち会うことができ、生命の誕生の素晴らしさと重みを改めて強く感じることができた。

家畜はペットではない。だから特別な感情移入をしてはいけない。しかし、だからといって雑に扱ってよい訳ではない。私たちが普段何気なく食べている肉は、生命が誕生してから様々な過程を経て私たちの食卓へ届く。食卓に届くまでの道のりは



決して楽ではなく、言い換えるとドラマのようなものだと思う。途中で死んでしまうものもあれば、怪我をしてしまうものもある。食卓に安全で美味しい肉をとどけるために注射を打つこともある。沢山の苦勞を乗り越えて私たちの食卓に並ぶ肉に、私たちは感謝の意を示さなければならぬ。私にできることは、家畜としっかり向き合うことだ。向き合えばその分だけ応えてくれるはずだから、その姿勢をこれからも大切にしながら生命と向き合っていきたい。

「はじめまして」から「ごちそうさま」までを学ぶことができる畜産科学科での学校生活は、生命と向き合いながら日々学び得ることも多く、毎日新しい刺激を受ける。動物の扱いはときに難しいこともあるけれども、それでも諦めないのは今の生活にやりがいを感じているからだ。瑞穂農芸高校に入ってから、「頑張っているね。」とか「えらいね。」など周りから沢山の言葉をいただくことがある。理解を示し、応援して下さる人たちのためにも、将来の自分のためにも夢を叶えられるように頑張ろうと思った。私は動物関係の仕事に就くために大学に進学し、視野を広げ、色々なことに挑戦していきたい。

## 学校の先生

東京都立大島海洋国際高等学校 三年

松川 まりも

私は、勉強を教えるのが先生ではなく興味をもって物事と向き合うことを教えるのが先生なのだと思う。

学校で教えられる数学や理科や体育や美術は将来、何の役にも立たないことが大半だ。私は今でも思っている。就職難だと言われる現代でも、勉強をしなくても職に就くことができる。実際、私の妹は中学生の時に不登校で、そのまま進学することなく、うなぎ屋という意外なところに就職した。それなら、なぜ小学校や中学校は義務教育とされるのだろうか。勉強を教えるにしても、例えば算数の足し算や引き算があればいいのではないか、もっと難しい問題が解きたいのであれば進学をすればいいのではないかと思ってしまう。

簡潔に言うと、私は学校に行くのは勉強を教えてもらうのではなく、道を広げるためだと思う。道が広がるというのは、数学や理科や体育や美術が、将来的に問題解決の選択肢になるということではない。確かにそれが絶対にならないということではないが、それは専門の職業に就いたからであったり、一部の教科の一部の単元が偶然当てはまっただけであったりということが大半だろう。だから私の言う道

が広がるとは、得意・不得意が入り混じる義務教育は、問題を解決する力と、問題に挑戦する勇気を教わることができるといふことだ。将来解決するだろう問題は二次関数や心臓の仕組みなんか覚えてしまっても解決できないだろう。ほとんどの大人は忘れてしまっている。だから、学校で教わるのは小さい問題から大きい問題に取り組み、それを解決できたという体験談あるいは成功例だ。特に小学校に入学した一年生は、初めて勉強にふれるという子も多いだろう。だから最初は簡単なものを習い、それが徐々に発展した内容に進んでいく。今、私たちは小学校一年生の問題なんてすぐに解けてしまうと思う。しかし、小学一年生の問題を解けたことを自慢することは少ないだろう。なぜなら、それらが積み重ねられて、次のステップが見えるようになっていき、戻るのは難しくなるからだ。逆に、挑戦できる勇気があれば次の壁を越えるのが楽しみになる。私はその楽しさを高校で知ることができた。苦手だった数学を一からわからないところをまとめ、先生に質問をし、徐々に解けるようになって、今では好きになった。良い経験ではあるが、少し遅かったと感じる。中学までの義務教育で、自分は何をしていたのだろうか。



学校で教えるものの大半は勉強だ。しかし将来使うことは少ない。ならば勉強を通して教わることがあるべきだ。しかも、勉強をするしないは先生によって絶対的に決められることではなく、自分で決めることだ。それならやはり先生は興味をもって挑むこと、積み重ねにより道が広がること、わからなかったことがわかるようになる楽しさを教えるべきだと私は考える。そして私自身、教員になって、子どもがそれを知るための手助けをしたい。苦手なことから逃げずに立ち向かうことは難しいが、それを乗り越えれば何事も良い経験になり得るといふことを伝えられるようになるのが私の夢だ。

## 食品ロスについて

東京都立忍岡高等学校 三年

齋藤麗菜

二年生の時に「食品ロス」についての授業がありました。この授業は食品ロスについて学んだ後に、フードバンクとして活動するところへ見学に行き、食品ロスについて考えを深めるという内容でした。

まず、食品ロスとは、食べられるのに廃棄される食品のことを指します。日本の食品廃棄物は年間二七五九万トン、そのうち食品ロスの量は年間六四三万トンと推計されており、日本の人口一人当たりの食品ロス量は年間約五一キロ

グラムです。また、世界の食料廃棄量は年間約二三億トンで、人の消費のために生産された食料のおおよそ三分の一を廃棄しています。なぜ食品ロスが起こるのか。私が考えたのは四点あります。

一点めは消費期限、賞味期限の違いを把握していないということ。消費期限は品質が早く悪くなるものなので期限が過ぎたら食べない方がよいものであり、賞味期限はおいしく食べることができるときの期限なので、多少期限が過ぎても食べることができません。賞味期限なのに日付が過ぎたからとすぐ捨てる、消費期限内に食べることなく捨てることになってしまったなどにより食品ロスが起こってしまったているのではないかと考えました。違いを理解し、買い物に気をつければ解決できるのではないのでしょうか。

二点めは外食が増えたということです。外食を頻繁に行っている人の中には、買った食品を食べることなくそのまま期限が過ぎてしまったという人がいるのではないかと考えました。また、外食が増えるということは店側の廃棄量も増えるということでありこれもまた関係しているのではないかと考えました。

いつか食べると思い買うとすることをしない、外食では食べられる量を注文する、店側は食べ残した場合お金をもらおう、食材の注文をしすぎないなどで解決できるのではないのでしょうか。

三点めは給食や家庭での残飯です。食べ物の好き嫌いがあったり、作りすぎたので捨ててしまったりしている場合食品ロスに大きく影響しているのでは、と考えました。私

が小学生の頃は給食の時間残飯が出ないよう先生が配りに回ったり、食べ終わるまで遊べなかったりと残飯がでない工夫をされていました。

また食べられない食べ物は食べられる子に食べてもらおう、人数分以上の量を作らないなどの工夫で解決できるのではないのでしょうか。

四点めは、売れ残りです。私がスーパーに行ったとき、売りきれず残った商品を大量に廃棄しているのを目にしました。多く注文すると、廃棄量も増えてしまいます。

どれも気をつければ食品ロスを減らすことはできるのではないのでしょうか。授業で習った対策の中に「三分の一ルール」がありました。これは食品業界の商慣習であり、賞味期限の三分の一までを小売店への納品期限、次の三分の一を消費者への販売期限としているのです。これは売り場に並ぶ食品に一定の長さの賞味期限を確保するのが目的です。しかし「納品期限について国が強制力を持たない」として、「お願い」ととどめていくそうです。

他にも廃棄ではなく安く売る、製法や容器の開発によって、賞味期限を延ばすなどの工夫もされているそうです。

ここまで学びフードバンクとして活動するところへ見学に行きました。フードバンクとは賞味期限が近いなど品質



に問題がないのに捨てられる食品を生活に困った家庭や施設に送る活動のことです。そこではCEOの方から話を聞きました。その中でフードバンクという活動で取り扱っている廃棄食の量は世界の廃棄食のうち一割にも満たないと話していました。私はそれを聞いて世界ではそんなにも大量の食品を無駄にしているのかとショックを受けました。またここにはたくさんさんの食品があり、他にも子供達向けの小さな食堂や大量調理用のキッチンもありました。とてもステキな活動に感動しました。

この授業を通して、私には食品ロスの削減について国全体でどうにかしていこう、という力を持っていません。ですから私が日頃できることはその日に食べるなら期限の一番近いものを選んだり、無駄にたくさん買ったたりしない事だと思いました。また先進国であるからこそ食べられることが「当たり前」と思い、それについてのありがたみが薄いのではないと思いました。好き嫌いをしてることがわかりやすい例だと思います。わたしたちはもっと食べ物をお大切にすべきであり、食べられる「当たり前」に感謝をすべきです。私はこの授業を受けてから買い物時や食べるタイミングに対しての意識が変わりました。食品ロスの現状を多くの人に知ってほしい。そして見つめ直してほしい。食品ロスについてまず身近な人から伝えていきたいです。

## はたらく意味

岩倉高等学校 三年

高橋 李央

このテーマで作文を書くうえで、まず最初に述べておきたいことは「私の父親は一人の社会人という観点で見た時、とてもすごい人だ。」ということである。

父は高校を卒業したあと大学に進学し、国家公務員試験に合格したのを機に中退した。それからは郵政省の職員として郊外の郵便局に勤めた。現在郵政省は民営化され、公務員でなくなったが、郵便局員として父は現在も働いている。あと数年で勤務歴三十年を迎える父、私が幼い頃には既に中間管理職であったため、配達や集荷という仕事よりデスクワークが主な職務だったと思う。だが私は無論、家で過ごす父の姿しか見たことがなかったため、どれほどの仕事量なのかなどは一度も考えたことがなかった。家で父は、私が起床する前には身支度を済ませ会社へと向かい、寝る時間になっても帰ってこないというライフスタイルだった。たまにまだ私が起きている時間に帰宅したときは、風呂に入って残り物の惣菜と酒で食事をし、そのあと自室で寝るだけだったため、私にとってはとても退屈な人だった。

だがある日、学校の校外学習で職業体験に行くことになった。行く職場は各々が選択する形式だったため、私は真っ先

に父が働く郵便局が頭を過った。父は職場で普段どのような仕事をしているのかという素朴な疑問があったからだ。この職場体験を、父親の仕事を知る良い機会であればと考えた私は即決で郵便局を選んだ。郵便局へのアポイントメントも滞りなく進み、当日職業体験を迎えた。応募したのが私一人だけだったため、郵便局へ赴いたのも私一人だった。計三日間、「本来体験となれば疑似の郵便局を使うが中学生だし大丈夫だろう」と郵便部長が言ってくださり、実際の郵便物を使用することになった。仕事内容は郵便物の分配や郵便番号の打ち込みなどあまり重要でない且つミスがあっても影響が及ばないものであったが、職業体験最終日、私は疲労困憊でぐったりとしていた。業務を体験するにも覇気がなく、携わった方々の話もしっかりと耳を傾けられる状態ではなかった。三日間、基本的に一日中立ち仕事であるのに加え、とても集中力を要する仕事だったため、比にならない量の疲労度が私を襲ったのだ。それ以来、私は父のことを凄く人間だということを感じるようになった。母は身体が弱く外で働ける人ではなかったため、生活費は父の給料で賄っている。私は今、私立の高校に通っているため授業料や定期代など莫大な費用がかかるうえ、妹も入部しているクラブの諸活動の都合上、遠くへ遠征に行くことが多いため、



出費が高くなる。それでも一家が生活を続けていられるのは父の直向きな努力の賜物だ。決して楽な仕事ではなかっただろうし、嫌な人もいただろうし、そんな人に頭を下げたこともあっただろう。それでも仕事を続けていられるのは、守るものがあるからだ。たとえば私の父は、「家庭」という大切なものを守っていた。無論、世の中には色々な人がいるため、一概に全ての人を守るべきものを守るために働いているとはいえない。だが私も、何か守りたいものの為に職に就きたい。それがなによりのモチベーションに繋がると思う。守りたいものはそれぞれ違うものでいい、自分の中に作るのが大切なことである。

今、私は第一希望の会社へ行くため就職活動をしている。今はただひたすら内定をもらうのに精一杯だが、来年の今ごろには研修期間も終わり、本格的に新入社員としてはたらくことになる。果たしてその頃に私は何か守りたいものがあるのか、ただがむしゃらに働いて日々を過ごしていかないかと少し不安でいる。社会人になれば人付き合いや日々の仕事で、大切にしたいものを探す余裕なんてないだろう。少なくとも私には無理だ。そうなると今この時期は、内定を取る努力と、何のために働くのかという私自身の職業観を見出すとても重要な時期なのだと思う。

いつか私も、父のように働く意味をもって職に就ける人になりたい。そのために今の私にできることは、守りたいものを見つけることなのだと思う。

## 我が双肩に担う

岩倉高等学校 三年

千葉 聖 仁

「ご利用ありがとうございます。」

二〇一八年の七月二十三日、私は東海道新幹線東京駅の改札で行き交うお客様にそう言いながら、練習した三十度の礼を繰り返していました。鉄道での現場実習の初日、ガチガチに緊張しながらも夢にまで見た憧れの現場に立った私の胸に、熱いものが込み上げていた事を、今でも昨日の出来事のように鮮明に覚えています。

一介の高校生が、志望する鉄道会社の駅の現場で実際の業務を体験させていただく。これが我が岩倉高校と鉄道会社の間で一二〇年以上の長きに渡って行われてきた鉄道実習です。会社側は素人同然の高校生を無給で、しかも普段の業務の中で受け入れてくださいます。だからこそ粗相があつてはなりません。

徹底した厳しい事前指導が実習の一月以上前から始まりました。身だしなみに始まり、礼儀作法や英語での案内、安全への心構えまで様々な事を叩き込まれます。実習帽と腕章を付けて現場に出る以上、お客様は実習生だろうがなんだろうが関係なしにこちらを頼ってこられる。そこには社員の指方々と同等の責任が発生します。だから自然と、先生方の指

導にも熱が入りました。全ては日本の鉄道の現場を汚さないために。ひいては日本の鉄道業界の未来のために。かくして、私達は実習の僅かな間、「鉄道員」になったのです。

とはいえ、やはり素人は素人です。初日の私はまだ右も左も分かりませんでした。そんな私に社員の方々は親身で懇切丁寧な指導を施してくださいました。初めての経験で張り詰めていた私には、その優しさが身に染みてありがたく感じられました。JR東海の社員の方々は、日々多くの、それも多種多様なお客様をご案内します。東海道新幹線東京駅の一日の平均利用者数は約十七万人、お盆などの多客時には三十万人を超える日もあります。

そんな中でも、社員の方々はお客様の立場に立って、お一人お一人のニーズに合わせた対応を忘れません。

ある社員の方が私に教えてくださいました。

「新幹線の運賃料金はお客様にとって決して安いものではない。それでもお客様に満足していただくために、我々は値段以上のサービスを追求していかなくてはならない。」

私はその言葉に感銘を受けました。

だから私も、お客様の立場に立って分かりやすい案内を追求しました。

例えば、

「新宿に行きたい。」

とお客様がおっしゃった場合、

「中央線をご利用ください。」

とご案内しても、遠方からの東京に馴染みのないお客様は中央線をご存知ないかもしれません。長距離輸送を主とする

新幹線ならではの問題です。ではどうすれば分かりやすくご案内できるのか。社員の方々から教わった答えは、「番線のご案内」です。中央線は東京駅の一・二番線に発着します。そのことを踏まえて、

「一・二番線の電車をご利用ください。」

とご案内するとベストなのです。こうして教わったサービス精神を胸に、私もなんとか不慣れながらお客様をご案内することができました。

私は、お客様からいただいた、「ありがとう。」や「Thank you。」という言葉と、その時のお客様の笑顔が今でも忘れられません。鉄道はただ人を運ぶだけじゃない。そのことを強く実感した瞬間でした。

二日目、三日目も同じように改札での実習が行なわれました。そこには日に日に改札に立つことが楽しくなっている自分がいました。憧れの社員の方々の側で学びながら、自分もその社員として存在できる。あまつさえお客様から感謝の言葉までいただける。そこは東海道新幹線の現場で、誰もが認める日本を支える大動脈である。私はその時とても充実していましたし、何よりある種の静かな誇りさえ感じていました。やはり自分はここで働きたいと、志望の意志をさらにより強く、よりゆるぎないものとすることができました。

そんな色々なことを学んだ鉄道実習でしたが、何よりも大きかったことは、「安全」の重要さを再確認できたことでした。最終日の四日目、私達は車掌や運転士の方々が勤務する運輸所の見学をさせていただきました。そこには車掌業務の訓練専門のシミュレーターがありました。これは三島駅でお客様

がドアに挟まれたまま引きずられなくなってしまわれた事故を受けて設置されたものです。シミュレーターがおかれた部屋の壁には、自己の状況とそれを忘れるなという掲示物が並んでいました。そこには自己を絶対に忘れない、教訓を形骸化させないという覚悟がありました。

その時にある社員の方が、  
「安全を守ることができなければ、鉄道員が存在する意味はない。」

とおっしゃった一言が、私の胸に突き刺さりました。私は、東海道新幹線の五十年以上に渡る安全を守ってきたのは、他ならぬ現場の鉄道員の方々のこうした安全に対する強い意思なのだと感じました。「安全の確保は、輸送業務の最大の使命である…」安全綱領にもあるこの最も大切な事柄を、私は鉄道実習で心に刻みました。

あれから一年、私は今、来る九月十七日の採用選考に向けて日夜就職活動に粉骨砕身で励んでいます。そんな時いつも思い出すのは、鉄道実習で見た社員の方々の姿です。私は鉄道の、ひいてはこの国の未来を我が双肩に担う身として、あの日見た社員の方々のように立派な鉄道員に絶対になっしてみせます。



## 将来の夢

岩倉高等学校 三年

福田 優也

列車の運行に携わりながら様々なお客さまとの関わりを大切にしていきたいことが、私の夢です。今現在、アルバイトで接客をしていますがお客さまと関わりたいと思ったきっかけは小学校低学年の頃に遡ります。

都内のある動物園のモノレールに家族で乗車したことがありました。普段から利用している電車と一味違う乗り物に、私は興味津々でした。すると、

「ぼく、モノレール好きなの？」

職員の方からお声がかかりました。当時幼かった私は、その返答なのか目をキラキラ輝かせていた、と両親は言います。ご厚意で非売品のグッズまでいただき、その職員の方に強く憧れを抱きました。幼いながらも「将来自分も人と関わりたい！」という気持ち、心の片隅にあったのだと思います。

その気持ちのまま小学校、中学校と進学し数少ない鉄道友達と過ごす日々が続きました。そんな中、驚くべき事実を発見しました。鉄道専門の高校から、そのまま鉄道会社に就職できること。将来の夢のため、高卒で鉄道会社に入るという進路を選びました。高校の授業は専門性を極め、実際にお客さまとの接し方を学びました。特にホスピタリティという授

業では、体の不自由な方の対応を具体的に言い、車いすの正しい押し方や、白杖をお持ちのお客さまの先導の仕方など、日常では学ぶ機会のない貴重な経験をしました。また、自身もおもりを着け、ヘッドホンとゴーグルをし、高齢者の方の疑似体験もしました。

おもりのせいで思ったように動けず、とくに階段の昇り降りが大変でした。その時、無意識のうちに頼っていたのは、設置されている手すりの存在です。実際に体が動かしづらくなることで、当たり前前にある設備がとてもありがたく感じました。

授業を受けるたび、お客さまと関わりたいという思いが強くなり、鉄道実習に参加することにしました。私はとても大きな駅に配属され、自分との関わりがなかったため、初めは不安な気持ちでいっぱいでした。社員の方が優しく接して下さり不安が解けただけでなく、お客さまに目的地の場所を教えることに、自信もついてきました。今回の鉄道実習で、自分あまり詳しくない土地や場所でも教える経験を積むことで、自信がつき接客がとても好きになりました。案内だけに留まらず、改札付近のゴミを拾ったり、列車の運行状況を確認したりするなど、やはり駅員の仕事は多かったです。しかし自信がついた案内とともに、お客さまの命を預かることからやりがいを感じ、ずっと続けたい仕事だと思えることができました。

接客という面でさらに磨きをかけるため、アルバイトで接客業も始めました。鉄道実習の五日間と違い、始めて約二年になるので、接客が日常の一つとなっています。私が働くお

店の周りは飲み屋さんが多く、昼間から酔っている方への対応に苦戦しました。一般的な形式でお客さまのご要望を聞いても、酔っているため何を欲しがっているか分からず、お客さまも不満そうな表情でした。ですので、そのようなお客さまに對しては、ご理解いただくまで話を繰り返して、確実な案内を実現してきました。また、お客さま、従業員を含め様々な意見があるので、その場合は相手の方の話を最後まで聞き、ご意見を全て受け止めるなど、工夫をこらしました。実際にお客さま対応を数多く経験したことは、駅での案内でも活かせるものだと思います。

鉄道は世間にとって当たり前の交通手段でそれを支える鉄道員はなくてはならない存在です。日常の一部である存在で、怪我や事故などに巻き込まれてしまっただけで、不安になりその会社全体の信用度、そして鉄道自体の利用度が下がってしまいます。ですので私は、高校生活での豊富な経験を忘れず、活かしながら安全を第一に考え行動できる職員を目指します。

## 想いを形に

日本工業大学附属高等学校 二年

小田翔大

私の将来の夢は、建築の施工に携わる仕事に就くことです。私が小学校の頃に見ていた「ビフォーアフター」という番組で、建築士一級の匠が様々な問題を抱える家を見違えるほどきれいにリフォームしているのを見て、建築関係の仕事に興味を持ちました。中学生になり、受験する学校を探している時に、先生に今の高校を紹介してもらいました。学校見学では、興味引かれる多様な設備を見て、テレビで見た匠たちと同じように私も道具を使えるようになれると思います、胸が躍りました。

高校に入学し、夏休みの期間を利用して十種類の資格を取得しました。その中の一つであるガス溶接では、手ではできない金属の加工を行えるようになりました。具体的には、金属を熱して金属同士をくっつけたり、金属を酸化させてガスで吹き飛ばすことで溶断したりする技術を学びました。初めて加工したのは、約十センチメートルの小さな鉄板でしたが、この技術を利用し、街中の大きな建造物が造られるということに感動し、ものづくりへの興味はさらに高まりました。

私の住んでいるマンションは、外からはコンクリートしか見えませんが、内部の骨組みには私が学んだ溶接が利用され

ています。また、以前見学した建設途中のスカイツリーにも、溶接の技術が利用されています。私も将来、スカイツリーのように多くの人が見上げるような建造物を建てたいと考えています。

授業では、身近にあるホームセンターでも買えるようなセメントや小石、砂利と水でコンクリートが作れることを学びました。実際コンクリートを作って、材料の比率によって硬度が変化したり、固めるために二週間の時間を要したりすることを学びました。ありとあらゆる場所に用いられているコンクリートですが、実はその作業は地道なものであることを実感しました。コンクリートの耐久テストでは、二リットルペットボトル程の大きさのコンクリートでも十トンのプレスに耐えました。将来、自分が建てる家に利用されるコンクリートが、首都直下型地震に耐えられるようになるには、どう工夫したらいいのか、何十年にも渡って使用できるコンクリートをどうやって作ればいいのか、考えるきっかけになりました。

高校入学から学び始めた製図では、常に平行に線を描ける定規を用いて作成する手描き製図と、パソコンを利用して描くCAD製図とがあります。昔は手描きの製図が主流だったようですが、現在ではCAD製図が主流となっています。普段、不動産屋さんで見る図面もCADで描かれています。今は、モデルを写しているだけですが、私の想像した家を思うがままに図面で表現できるようにしたいと考え、日々努力しています。

また、二年生で初めて学んだ模型作りでは、平面だった図

面から立体にする方法を学びました。製図よりも立体に起こすことで、完成イメージが想像しやすくなります。図面の見方や材料・用具の選び方も立体模型を作る上で重要な知識、技術です。

これらの授業を通して、ものづくりへの意欲は日に日に増していくばかりです。

私が、建築を学べる高校に進学したいと母に伝えたとき、母は、我が家のリフォームができるようになってほしいと私に言いました。小学生の私が憧れて毎週見ていた発想豊かな家々は、まだ憧れかもしれません。しかし、いつかは造ることのできる人になりたいと思っています。そして、母の願いを叶えたいと思っています。

今は高校二年生ですが、大学に進学し、さらに知識と技術を高めていきたいと考えています。そして、平面の図面に込められた人の想いを形にしてゆく仕事に就くことが、私の夢です。



## 偏見を無くして見えてきた将来

日本工業大学附属高等学校 二年

滝澤 壮太

「工業科は勉強の苦手な人が行く」そのようなことをネット上で見たり、友人が自虐ネタとして使っているのを見る、それに流されて自分は将来に不安を感じたり他校の友達にどこの高校に通っているかを話すのをためらったりしていた。

二年生になりさらに進路について深く考えなければならなくなり、様々な大学に目を向けても、頭のどこかで、工業科高校出身の自分が入れるのだろうか、という思いが邪魔をされていて「工業科」はマイナスなワードとして捉えていた。

そのような考えを払拭したのは数学の授業で先生がしてくれた話だった。

「工業高校の生徒は勉強が苦手だと見る人もいるけれど、これからの日本を支えるのは工学の知識や現場での技術を身につけた人たちなんですよ。」

先生は雑談のつもりだったかもしれないが、この言葉が心に残っている。

今は旋盤加工や回路の組み立てだけでなく、建設設計やプログラムなど、幅広い分野を学んでいる。学びたかったものや、学んでみて面白いと感じたもの、中には興味の湧かなかったものもあった。しかし、学んだ分野それぞれの先には仕事があり、

その仕事につながる経験ができるのはそれだけ将来の選択肢が増えるということだ。つまり、他の人より有利な立場にあると言えるだろう。

また、先生方はベテランなので、専門的な内容を学ぶことができる。そして、興味のある職業について詳しく聞くこともできる。必要な資格、取得のための勉強の仕方など、インターネットでは分からないことも知ることができる。

夢は、ゲーム関係の仕事に就くことだ。その中でもプログラマーかキャラクターデザイナーの二つに今は興味がある。そのため、進路は専門学校に進もうとしている。専門学校に入ってから深く学ぶことも大切だが、今のうちから授業外でも先生から学べることは学び、土台を完璧にしてから、その上に新しい知識を取り入れていきたい。

そして、今までの工業実習の経験も活かしたいと考えている。デザインの授業では、ものをあらゆる角度から見ると力や養うことができた。また、レポート作成では人に分かりやすく説明する力を身につけることができた。

それだけではない。ゲーム関係の仕事は英語を多く使うことになるだろう。今後の授業でも努力していきたい。また、同じチームの仲間たちとのコミュニケーションも密にしていかなければならない。今までの実習の中でも、チームで問題解決に当たるといったことは幾度となく経験した。実習で培った集中力、忍耐力を發揮したい。

工業を学んでいるのに、ゲーム関係の仕事に将来向かうのは、選択を間違えたのではないかと思う時も確かにあった。しかし、先日、学校内で行われた希望進路発表会で皆の将来の夢を聞

くと、必ずしも皆が工業や情報関係の進路を目指しているわけではないということを知った。工業高校だから将来が限られてしまうのではなく、それどころか、工業でしか学べない幅広い視点を持つことができたと実感している。

近い将来、自分が成功した姿を見せて、工業科が持つマイナスイメージを、プラスに変えて社会に発信できる人間になりたい。

**専修学校の部 最優秀賞**

**変化と不変**

**社会での経験が今に活かせる**

青山製図専門学校 一年

中村直也

平成から令和へ移り変わり、オリンピックを翌年に控える日本は今、人材活用の面で大きな転換点を迎えている。働き方改革に伴い労働環境や雇用体系は目まぐるしく変化し、売り手市場によって人手不足が生じ、企業は省人化対策やAIの活用、外国人登用など官民が連携し対策をとっている。これから社会に出て働く者にとっては売り手市場によって環境が良い反面、ヒトだけでなくAIや外国人などライバルが多く存在し、個々のスキルが大きく問われる実力主義的な世の中になることが想定される。そのような状況下でもこれから

社会に出て働くということは大変な反面、いかにやりがいがあり、尊いことなのかを自身の体験を踏まえながら論じていきたい。

私はリーマンショックの最中に大学へ入学し、東日本大震災の年に就職活動を行い、ドル円の為替レートが80円を切る異常な円高の中、証券会社へ入社した。当然、現在とは大きく異なり就職氷河期の真っ只中であった為、就職活動は相当に苦労した。日経平均株価は最安値であったこともあり、親戚には何故よりによって証券会社なのかと言われてしまう始末だった。その後、入社年後半に政権交代が起き、安倍・黒田両トップによる金融緩和政策によって相場は大きく好

転した。当然企業の株価は上昇し、主要産業が輸出業の日本にとって円安への転換は企業の利益を大きく押し上げた。これが今も続く経済好環境の始まりであり、企業の採用も大きく変化し売り手市場化していく。私も相場の波に乗り、証券マンとして実績を積んでいた。どの株式でも上昇し、お客様に



専修学校の部 最優秀賞 中村直也さん

喜んで頂ける好循環の中で仕事ができ、私を大きく成長させると同時に大きな慢心となって今後跳ね返ってくることになる。株価上昇は一方通行で続くはずもなく、チャイナショックにより大きく下降していく。これまでのお客様との良好な関係は180度変化し、連日お叱りを受け謝罪をするという日々へ変わる。顧客満足度の向上などの取引規制の強化・厳格化の波が押し寄せ、働くことが本当に辛かった。しかし今考えてみるとこの経験が今の自分を大きく変化させる要因となっている。自分ありきではなく、いかに取引相手のことを思うか。そして決められた規則や時間制限の中で、要領良く効率良く業務を進められるかの2点である。例えば初動の大切さ。悪いことをしたら謝るのは子供でもできる当たり前のことだが、大人になると意外と難しい。怒られたくない気持ちや無駄に賢くなったせいで逃げ方を知り、なんとかその場をやり過ごそうとする。これがいかに愚かな行いなのかは実際に経験して身に沁みないとわからない。企業トップの謝罪記者会見などでも初動対応の甘さが事態を大きくするような、初動対応はどんなビジネスの場でも重要な共通事項である。また働き方改革に伴い、各個人の時間管理が難しくなっている。限られた時間の中で計画を立て、その日のスケジュールを逆算しながら着実に行動していくことは少し前の時代より重要なウェイトを占める。時間管理を癖づけることが出来れば、社会に出て通用する人材になるのは早い。

様々なことを学んだ社会人生活に転機があったのは昨年のことだ。7年間勤めた会社を離れ、幼少の頃からの夢であった建築の道を志すことを決断した。自分でもかなり思い切っ

たことをしたと思う。一回り歳の離れた学生が多い環境になじめるかどうか、また文系で育った環境から緻密さや発想力が多く求められる学習内容についていけるかどうかなど心配事は尽きなかった。だが実際に学校に通ってみると心配事は杞憂に終わり、毎日新しいことを学ぶことは本当に楽しい。製図やPC操作の技術は目に見える形で向上し、今まで普通に歩いていた街並みも捉え方が大きく変わった。過去の建築史を彩る偉人の建築物に思いを馳せ、それが現代にも現存している奇跡は建築に生きる者の大きな生き甲斐であり、私自身もそんな建築物を設計することが大きな夢となっている。学校へ入ったことで考え方が大きく変わることはない。今まで培った社会人生活の経験は大きく役立っている。殊に時間管理の癖づけにおいては学校でも同じである。期限までに課題を提出することや、自身で目標設定をして資格取得に励む勉強への取り組み方は働いている時と同様、主体がお客様でなく自分に変わっただけで大いに役立っている。また年下の多くいる環境下では私が再就職後に管理職となった際、部下をまとめ上げる時の予行練習として、多くの関わりを持つように心がけている。受け身になることなく能動的に今の環境を楽しむことは私自身を大きく成長させてくれている。長いようであっという間の学生生活の中で多くを学び、吸収しそれをアウトプットすることを心掛けていきたい。

働くということは尊いことである。最後にこれを伝えたい。人が動くと書いて働くであるが、何も動くのは身体だけではない。社会に出ることで成功体験を得ることもあれば、自身の甘さを痛感することもある。気持ちが大きく動くこと

で人はより成長できる。高収入を得ることも大切なことだが、それは結果であって目的ではない。ゴールではないと思って  
いる。社会人での経験が今の学生生活にも影響を及ぼし、それが今後の人生においても良い作用をすると信じて、今の自分と逃げずに向き合っていきたい。

専修学校の部 優秀賞

旅の途中

青山製図専門学校 一年

渡 邊 あゆみ

自分自身の人生が、一つの大きな旅だったとしたら、私は今、どこに在るのだろうか

決して関わることをのらないと思っていたこの「建築」という世界に、飛び込んでしまった日から、もう四か月も経つ。忙しい毎日の中で、日々新たなことを学び、吸収している。草原に生えている雑草のように、太陽の光を浴びて、風に吹かれて、ポツポツと降る雨に打たれて、成長し続けたいと思う。

私の身の回りに、建築に関わる仕事をしている人は、一人もいなかった。生まれてからずっと、あまりにも身近にありすぎて、何かを感じたり、考えたりすることなど無かった「建築」というものの存在に、興味を持って取り込まれてしまっ

たのは、高校を卒業して一人暮らしを始めてからのことだった。十八年間生活してきた実家とは全く異なる環境での暮らしとなった。そこは自分のための空間で、自由で、全てを自分で決めることができた。それがすごく楽しくて、毎週のように部屋の模様替えをしたり、新しい家具を探しては、様々な部屋をイメージしたりして、そんなことをしていたら休日があっという間に終わっていた。

でもある時、もう新しいパターンが思い浮かばなくなって、そしたらぱっと思いついた。

「建築そのものを自分でつくったら、もっと自由に好きな部屋をつくれるんだ。」

そう思ったときに初めて「建築」という大きな存在に気が付いて、意識し始めた。でもこの時は、自分には建築の設計ができるはずだと思っていたし、建物をつくることイメージすらできなかった。だからこそ、すごくやりたくなってしまう。幼い頃から、何かやりたいことがあるとすぐやりたくなくなってしまいう性格だった。そんな私を家族はいつも見守ってくれていたし、応援してくれた。支えてくれていた人の存在にとっても感謝している。そしてそれが、私の日々の活力になっている。

私の通う専門学校には、様々な人が通っていて、年上の人もいれば、年下の子もいて、留学生もいる。先生方も様々な方がいるけれど、皆さんそれぞれの方法で私たちと向き合っていて、毎日多くのことを教えてくれる。そこで受ける刺激はとても大きくて、学ばせてもらったり、気づかせてもらったり、助けてもらったり。自分にとってプラスになることがたくさん

んある。同じ目標に向かってる仲間たちと共に学んでいるから、私も頑張ろうと思える。こうして今、学べる環境があることに、そこに通えることに、改めて感謝したい。

学校が始まる前は、建築といっても住宅設計にしか興味がなかった。でも勉強していくうちに、様々な人の話を聞いていくうちに、目標ややりたいことが変化してきて、資格は二級建築士を取得できれば良いと思っていたけれど、今は一級建築士を取得して、住宅だけでなく公共施設の設計もしたいと考えている。たった四か月で、自分の気持ちがあんなにも変化するとは思っていなかった。正直とても驚いている。でも、一度思ってしまったから、もう後戻りはできないと思っている。

今はただ、前に進んでいくだけだから、建築を学ぶことの楽しさを感じながら、色々なことを学んだり、研究したりして、もっと明確に自分のやりたいことをみつけていきたい。

色々考えていく中で、建築の面白さって何だろうと、ふと疑問に思った。有名な建築家の方たちはよく「建築とは？」という質問に対して、それぞれの考えを述べられている。今の私にそんなことは語れないけれど、私がどうして建築の世界が面白いと思うのかというと、建築は未来を創るものだと思うから。それも、静かに、壮大に。とても夢のある世界だと思う。私たち人間にとって建築は、生きていくうえで絶対になくしてはならない存在。

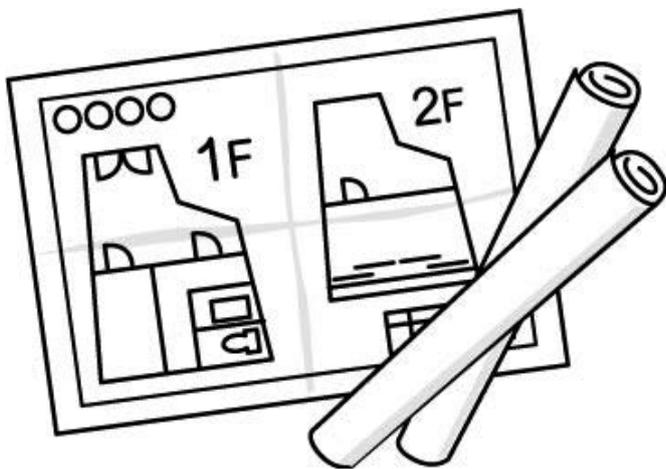
それ故に、建築物をつくるということの責任はとても重く思う。人の命に関わる仕事だから。しかし、責任の重さというの逆には考えれば、とてもやりがいのあることだと思っ

建築を通して、社会を、未来を変えていきたい。人々を豊かにする、人々を守る建築物をつくりたい。今の私はそう思っている。

自分の将来なんて誰にも分からないけれど、私はこの建築の世界で、働いていきたいと思う。人を幸せにすること、社会に貢献すること、それができたらきっと、自分自身も周りの人たちも、幸せなのではないか。

これから先何十年も続く、長いながい私の人生という名の旅に、たくさん希望をもって、一步一步確実に、歩み続けていきたい。

この旅の果てに、美しい、素晴らしい景色が広がっていることを信じて。



# 自分と相手の個性

国際理容美容専門学校 一年

羽田 愛華

「自分と相手の個性を生かせる、私にしかできないこと」。これは、私の職業観である。職業観、それは「職業に対していただく一定の観念」つまり、「その職業に対する価値観」である。あなたの職業観は何だろう、と百人に問えば、きつと百の意見が返ってくる。職業観とは、人それぞれ違うものである。

私の将来の夢は、美容師になることだ。美容師という職業は、パーマネントウェーブ、結髪、化粧等の方法により、容姿を美しくするサービス業就労者である。そもそも、私が美容師という職業を目指したきっかけは、美容師をしている母の友人である。母の友人の手によって美しくなって笑顔になっていく光景が、小学校三年生の幼い私の目に輝いて見えた。それと同時に、私もいつか自分の手で人を美しく、笑顔にしたいと思ったのだ。それから私は、いち早く美容の勉強ができ、普通よりも二年も早く美容師の国家資格を取得することができる、国際理容美容専門学校へ進学をした。実際に学校に入り、「国際生」としてここで学ぶ前までは、職業観などあまり深く考えたことはなく、近い未来に自分が働くという実感さえに等しかった。だ

が、入ってすぐに接客用語を学んだり、ビジネススマイルで身だしなみや挨拶、言葉遣いなどの様々なことを学んでいくうちに、「働く」という意識がでてきた。特に、二泊三日で行われた全科一年生合同の宿泊オリエンテーションでは、本当に多くの経験と学びを得ることができた。全学合同であったため、自分より年上の人が周りには大勢いる中で、一緒に生活をした。実際に、将来働くときに同期となる人は、自分より年上の人がばかりである。だからこそ、一緒に生活をしていくなかで、年上の人とのコミュニケーションをとれたことは、貴重な経験となった。だが、それ以上に多くのことを学べたことがある。それは、各料それぞれで、卒業期の理想像を決め、それを全体で発表する、ということだ。私たち美容高等科は全員で六十人。少人数だとスムーズに意見がまとまっていたが、六十人という大人数ともなると、大まかな理想像一つ決めるのにさえ、すごく時間がかかった。

まだ、出会って一ヶ月もたないという状況のなかでもあり、それぞれの意見はすれ違いを繰り返した。だが、付き添いで来て下さった先輩方のアドバイスをもらい、それを基に自分たちでもう一度考えて、「若さを武器に」という理想像をつくりあげた。この理想像は、いち早く美容師になれる私たちだからこそのものである。理想像をつくりあげるなかで、自分たちの将来と向き合うきっかけとなり、職業観を考えるきっかけとなった。

入学してから約四ヶ月という短い期間ではあるが、その短い期間のなかでも多くの経験と学びを得た。少しずつ職

業観を考えるようになり、美容師という職業を今までよりも身近に感じられるようになったからこそ、視野が広がってきた。美容師は、お客様のクセや個性を消すのではなく、生かしていくことでその人だけの魅力を引き出すことが出来る職業であると思う。そこに自分の個性も生かすことができたなら、それは世界に一つのスタイルになるのではないだろうか。「自分と相手の個性を生かせる、私にしかできないこと」。これは、今の私の職業観だ。働くということは、生活をしていくうえで、また、より充実した豊かな日々を過ごすために、必要不可欠である。しかし、その働く職業が自分の好きなことで、なおかつ、「自分と相手の個性を生かせる、私にしかできないこと」であれば、これほど幸せなことはないだろう。

今の私は、美容師になるという夢を叶えるために、スターラインに立っているにすぎない。これからの生活をどう過ごしていくかによって、私の未来は豊かなものにもなれば悪いものにもなっていく。自分と相手の個性を生かせる、そんな美容師に、人間になるために、私は前向きに、自分と向き合ってこれからを過ごして生きたいと思う。職業観、それは「職業に対していなく一定の観念」。つまり、「その職業に対する価値観」。これを機に、あなたも一度「私の職業観」を考えてみてはどうだろうか。今働いている人も、これから働く人も、その職業に自分なりの価値観をみつけてみよう。



## 令和元年度 作文コンクール 応募校一覧（応募数・入選数）

### 〈中学校の部〉

番号	設置者	学校名	応募人数	入選者数
1	中央区	佃中学校	10	
2	新宿区	牛込第二中学校	1	
3		西早稲田中学校	4	3
4	文京区	第九中学校	8	
5	墨田区	吾嬬第二中学校	5	
6		文花中学校	4	1
7		寺島中学校	10	
8		吾嬬立花中学校	4	1
9	江東区	大島中学校	8	1
10		南砂中学校	6	
11		深川第七中学校	2	1
12	品川区	荏原平塚学園	1	
13	大田区	大森第一中学校	1	1
14		大森第六中学校	10	
15	杉並区	松浜中学校	1	
16	北区	赤羽岩淵中学校	8	1
17		稲付中学校	9	3
18	荒川区	第七中学校	10	1
19	足立区	第十中学校	9	
20		西新井中学校	10	
21	葛飾区	四ッ木中学校	10	
22		堀切中学校	7	
23	江戸川区	松江第五中学校	3	1
24	調布市	第八中学校	2	1
25	町田市	真光寺中学校	10	1
26	新島村	新島中学校	1	
27	東京都	大泉高等学校附属中学校	10	1
28		桜修館中等教育学校	10	2
29	私立	愛国中学校	9	
計			183	19

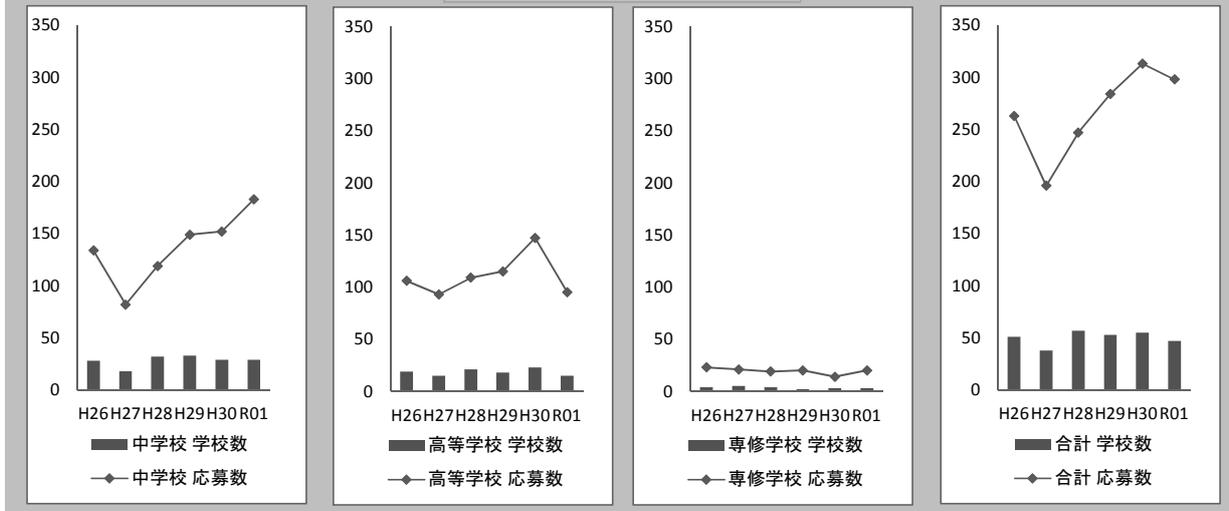
### 〈高等学校・専修学校の部〉

番号	学校名	応募人数	入選者数
1	東京都立農芸高等学校	4	1
2	東京都立農産高等学校(全)	3	
3	東京都立農業高等学校(定)	1	1
4	東京都立農業高等学校	10	
5	東京都立瑞穂農芸高等学校	9	2
6	東京都立荒川商業高等学校	1	
7	東京都立葛飾商業高等学校	1	
8	東京都立第三商業高等学校	9	
9	東京都立忍岡高等学校	10	1
10	東京都立大島高等学校	6	3
11	東京都立大島海洋国際高等学校	10	1
12	東京都立八丈高等学校	7	
13	愛国高等学校	10	
14	岩倉高等学校	7	4
15	日本工業大学 駒場高等学校	7	2
小計		95	15
1	青山製図専門学校	9	2
2	国際理容美容専門学校	10	1
3	中央工学校	1	0
小計		20	3
計		115	18

### 〈まとめ〉

応募校数(入選校数)		応募人数	入選者数
中学校	29校(14校)	183	19
高等学校	15校(9校)	95	15
専修学校	3校(2校)	20	3
総計	47校(25校)	298	37

## 応募数・応募校の推移



	中学校		高等学校		専修学校		合計	
	応募数	学校数	応募数	学校数	応募数	学校数	応募数	学校数
H26	134	28	106	19	23	4	263	51
H27	82	18	93	15	21	5	196	38
H28	119	32	109	21	19	4	247	57
H29	149	33	115	18	20	2	284	53
H30	152	29	147	23	14	3	313	55
R01	183	29	95	15	20	3	298	47

### 応募数の変化(前年度から見た変化)

校種	平成28年度(2016)		平成29年度(2017)		平成30年度(2018)		平成30年度(2018)		令和元年度(2019)	
	応募数	増減	応募数	増減	応募数	増減	応募数	増減	応募数	増減
中学校	134⇒82	39%減	82⇒119	45%増	119⇒149	25%増	149⇒152	2%増	152⇒183	20%増
高等学校	106⇒93	12%減	93⇒109	17%増	109⇒115	6%増	115⇒147	28%増	147⇒95	36%減
専修学校	23⇒21	9%減	21⇒19	11%減	19⇒20	5%増	20⇒14	30%減	14⇒20	43%増
総数	263⇒196	25%減	196⇒247	26%増	247⇒284	15%増	284⇒313	7%増	313⇒298	5%減

### 作文コンクール 入選数の集計

校種	平成27年度(2015)			平成28年度(2016)			平成29年度(2017)			平成30年度(2018)			令和元年度(2019)		
	応募数	入選数	%	応募数	入選数	%									
中学校	82	13	16	119	18	15	149	23	15	149	23	15	183	19	10
高等学校	93	14	15	109	17	16	115	18	16	115	18	16	95	15	16
専修学校	21	3	14	19	3	16	20	4	20	20	4	20	20	3	15
総数	196	30	15	247	38	15	284	45	16	284	45	16	298	37	12
参考	選考要領は15%程度			選考要領は15%程度			選考要領は15%程度			選考要領は15%程度			選考要領は15%程度		

## 作文のテーマ別応募数一覧

### 【作文の内容】

次に示す学習を通して体験したことを踏まえて、そこから得た人生観・職業観、自己の将来に対する考え方・心構え等について述べたもの。

- ・中学校における技術・家庭科の学習
- ・高等学校、専修学校、高等専門学校又は短期大学における専門教科の学習
- ・勤労に関わる体験的な学習

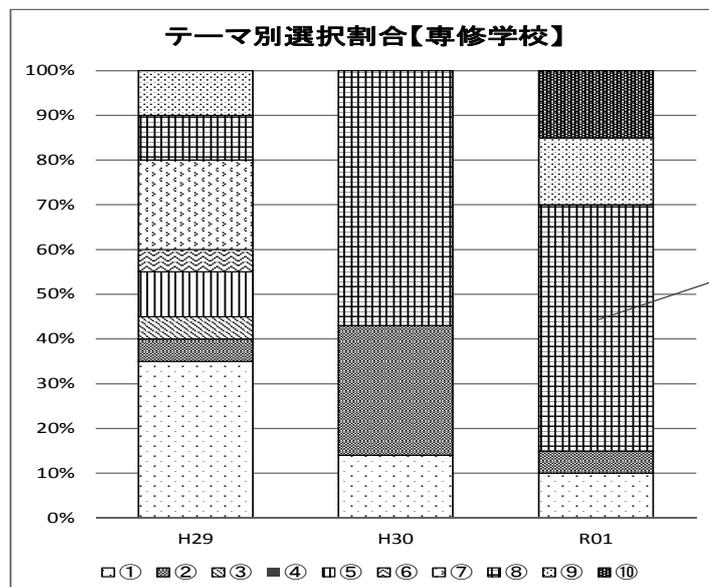
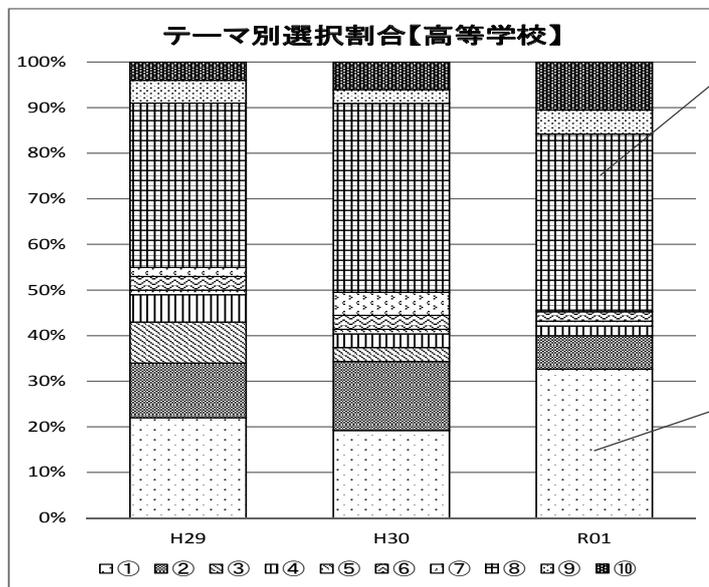
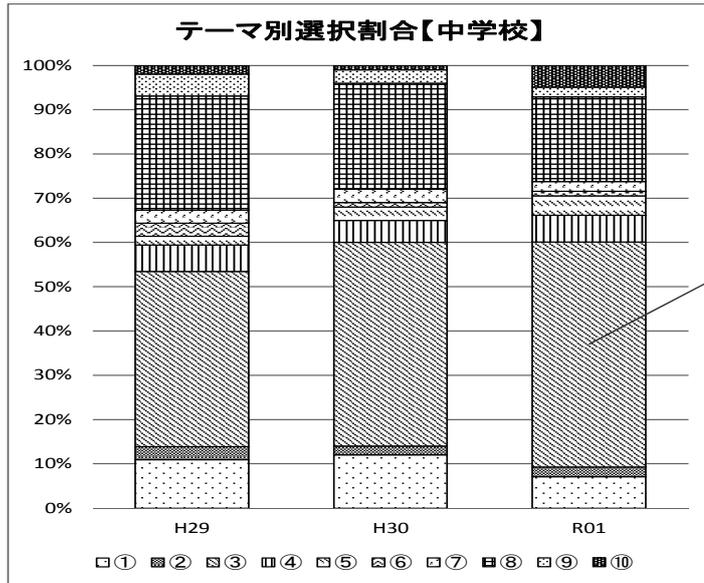
### 【テーマ】

作文の内容について、次のテーマ番号(①～⑩)から関係するものを選択して応募票の欄に記入する。

- ①授業等を通して学び得たこと
- ②インターンシップ(就業体験)や現場実習等によって学び得たこと
- ③職場体験やボランティア活動等によって学び得たこと
- ④つくることの喜び、ものづくりの喜び
- ⑤働くことの喜び
- ⑥学習に対する心構え
- ⑦私の生きがい
- ⑧私の進路、将来の夢
- ⑨私の職業観
- ⑩その他

### テーマ別選択肢とその割合

テーマ 番号	中学校の部						高等学校の部						専修学校の部					
	H29		H30		R01		H29		H30		R01		H29		H30		R01	
	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%	選択肢	割合%
①	17	11	19	13	13	7	26	22	29	19	31	33	7	35	2	14	2	10
②	4	3	4	3	4	2	14	12	23	15	7	7	1	5	4	29	1	5
③	63	40	70	47	93	51	11	9	5	3	0	0	1	5	0	0	0	0
④	9	6	7	5	11	6	7	6	5	3	2	2	0	0	0	0	0	0
⑤	3	2	0	0	8	4	1	1	1	1	1	1	2	10	0	0	0	0
⑥	4	3	1	1	2	1	4	3	5	3	2	2	1	5	0	0	0	0
⑦	4	3	5	3	4	2	2	2	7	5	0	0	4	20	0	0	0	0
⑧	41	26	36	24	35	19	43	36	61	41	37	39	2	10	8	57	11	55
⑨	8	5	5	3	4	2	6	5	4	3	5	5	2	10	0	0	3	15
⑩	3	2	2	1	9	5	5	4	9	6	10	11	0	0	0	0	3	15
合計	156	100	149	100	183	100	119	100	149	100	95	100	20	100	14	100	20	100



令和元年度 作文選考委員名簿 (順不同・敬称略)

中学校の部

委員長	稲城市立稲城第一中学校	校長	跡邊 昭枝	委員長	東京都立青梅総合高等学校	統括校長	鈴木 信也
委員	江東区立深川第七中学校	校長	佐川 明夫	委員	東京都立農産高等学校	校長	伊達崎 広
委員	足立区立第十中学校	校長	早乙女 雄一	委員	東京都立杉並工業高等学校	校長	高 幹明
委員	荒川区立第五峡田小学校	校長	出井 玲子	委員	東京都立江東商業高等学校	校長	岡本 裕之
委員	町田市立真光寺中学校	校長	矢島 加都美	委員	安部学院高等学校	校長	安部 元彦
委員	中央区立日本橋中学校	副校長	磯田 耕司	委員	東京都立大崎高等学校	副校長	小川 直哉
委員	小平市立小平第六中学校	副校長	吉田 功	委員	国際理容美容専門学校	副校長	佐谷 肇
委員	江戸川区立松江第五中学校	副校長	濱川 一彦	委員	日本工業大学附属駒場高等学校	教諭	原田 宏子
委員	小平市立小平第五中学校	副校長	深井 明美	委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	課長代理	浦 島 真由美
委員	足立区立伊興中学校	副校長	千葉 千登勢	委員	教育庁指導部高等学校教育指導課	指導主事	金子 将之
委員	教育庁指導部義務教育指導課	統括指導主事	鈴木 太郎				
委員	教育庁指導部義務教育指導課	指導主事	宮西 真				

高等学校・専修学校の部

## あとがき

はじめに、令和元年度の作文コンクールの表彰式が無事に終わり、受賞者の生徒・学生さんには心よりお祝い申し上げます。また、式会場などのご後援いただきました東京商工会議所の皆様方にはご尽力いただき厚くお礼申し上げます。

さて、「明日に生きる」作品集も第30号の発行になりました。今年度も優れた作品が揃いましたので、選考委員の皆様には優秀作品の厳選には心から感謝申し上げます。

応募作品の原文はできる限り尊重して編集しておりますが、人権上問題のある表現や明らかな誤字や脱字については作品の文意を損なわない範囲で直させていただきました。

また、イラストの部では、輪番制の応募で昨年の中学生から今年度は高校・専修学校生の選考になりました。これも一人ひとり独特な表現力のある作品が多く、選考委員会では一度では決まらずに当会の30号にふさわしいものになるよう吟味いただきました。

おわりに、当会作文コンクールを通じて、主人公である生徒・学生の皆さんが明るく伸びやかな気持ちで人間として豊かな力をつけていく場として、今後もこの作文コンクールが活用されることを願ってあとがきといたします。

## 御後援

令和元年度の作文コンクールの御後援をいただきました。  
表彰式においてもご協賛いただき心より感謝申し上げます。

### 【 東京商工会議所 】

〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-2-2 (丸の内二重橋ビル)

<https://www.tokyo-cci.or.jp/>

The Tokyo Chamber of Commerce and Industry

明日に生きる 第三十号

— 作文コンクール入選作品集 —

令和二年三月一日 発行

発行 東京都産業教育振興会

〒163-8801 東京都新宿区西新宿1-18-1  
東京都教育庁都立学校教育部高等学校教育課内  
電話 〇三―五三三―〇一六七二九  
FAX 〇三―五三八八―一七二七

印刷 株式会社小葉印刷所

